
A.O.G -Agent Of God- ～代行者《エージェント》と三国の恋姫たち～

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・O・G — Agent Of God — エージェント 代行者と三国の恋姫たち

【Nコード】

N2406Z

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

また新たな一人の男が、今度は『恋姫無双』に似たセカイの地に降り立った。男は、このセカイで何をするのか……それはまだ誰も知らない。

今、新しい外史の幕が上がる!!

※この作品は、恋姫無双シリーズをモチーフにした2次創作小説です。

オリ主最強、キャラ崩壊、原作ブレイク、残酷な描写が苦手な方は、

あまりおすすめてできません。

又、この作品は、

『A. O. G — Agent Of God — 真剣で代行者に
恋しなさい!』

とクロスオーバーしています。もしよろしければそちらのほうも
どうぞ!

A. O. G — Agent Of God — 真剣で代行者に恋
しなさい!』

<http://ncode.syosetu.com/n9214y/>

オリキャラプロフィールその？（前書き）

オリ主とオリキャラの紹介をします。

オリキャラプロフィールその？

名 前… 室谷 大地

フリガナ…ムロヤ ダイチ

C V イメージ…木内 秀信（D A R K E R T H A N B L A C K
一流星の双子一の黒役^{ヘイ}）

年 齢…21歳

身 長…181.3cm

血 液 型…O

誕 生 日…12月24日

一 人 称…俺

あ だ 名…ダイチ

容 姿…スーパーロボット大戦OGの後ろ髪が長く紐で結んでいるキョウスケ・ナンブ

（通常時は、黒眼青髪、氣解放時は赤眼金髪）

武 器…刀 いままで培ってきた知識 体中に仕込まれている暗器

職 業…何でも屋

家　　　　　庭…家族なし

好きな食べ物…炒飯

好きな飲み物…鉄観音

趣　　　　　味…道具作り　料理　ギャンブル　バイク

特　　　　　技…一度見た技や動きはすぐに覚えられる。

大切な物…自分　バイク　師匠

苦手な物…人の心を踏みにじる行為　外道　小さい子供

尊敬する人…師匠

ある世界で何でも屋をしていた元傭兵。

あるとき、絶体絶命のピンチを管理者のルカに助けられ、
ルカにより代行者に任命され現在に至る。

普段は無愛想で寡黙だが、表面に出ないだけで実際は静かに燃える
熱血漢である。

己の熱しやすい性格をよく理解し自戒してはいる。

また、熱しやすい一方でプロ意識は高く、感情を押し殺して

目の前の任務に徹するように努めている正にプロフェッショナル。

赤子のときに剣の師匠に拾われ、15歳になるまで一緒に暮らして
いたが、

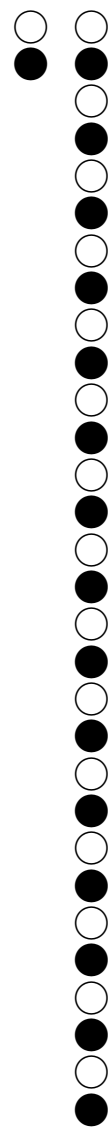
師匠の制止を振り切って、軍に入ったが、ある事件がきっかけで

嫌気がさし、軍を脱退、それ以降傭兵をしていたが、

ある人物と知り合い、何でも屋に転職した。

色恋沙汰には鈍いが、その立ち振る舞いからよく女性から惚れられる。

天然の誑しであるが本人は気付いてないから立ちが悪い。



名 前…ルカⅡツヴァイトⅡルミナス

フリガナ…ルカⅡツヴァイトⅡルミナス

CVイメージ…佐藤 聡美 (生徒会役員共 七条 アリア役)

年 齢…不明

身 長…160.0cm

3 サイズ…85 55 83

血 液 型…不明

誕 生 日…不明

一 人 称…私

あ だ 名…ルカ

容 姿…ああっ女神さまっのスクルド成人版(青眼金髪)

武 器…頬笑み 全知全能の力

職 業…第1級多世界管理者

家 庭…不明

好きな食べ物…不明

好きな飲み物…不明

趣 味…不明

特 技…どんなときでも頬笑みを絶やさない

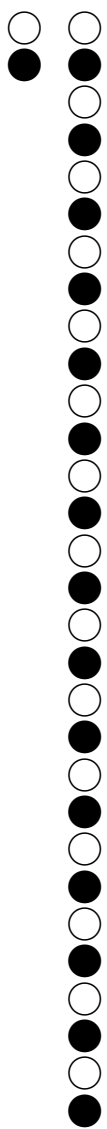
大切な物 …多くのセカイ 従者 代行者達

苦 手 な 物 …ネガ・マリス

尊敬する人 …不明

数多くのセカイを管理している神様。

※詳しくは『A・O・G — Agent Of God — 真剣
で代行者に恋しなさい!』
のオリキャラプロフィール参照



名 前…稲葉

フリガナ ..イナバ

CVイメージ..加藤 英美里 (まどかマギカ キュウベえ役)

年齢..不明

身長..110.7 cm

血液型..不明

誕生日..不明

一人称..私

あだ名..イナバ

容姿..西〇屋のロゴ

武器..不明

職業..神の従者

家庭..不明

好きな食べ物..不明

好きな飲み物..不明

趣味..不明

特 技…どんなときでも礼儀正しい

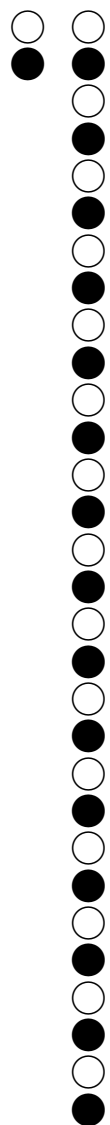
大切な物…ルカ

苦手な物…ルカの怒り

尊敬する人…ルカ

神の従者その1。

※詳しくは『A・O・G — Agent Of God — 真剣
で代行者に恋しなさい!』
のオリキャラプロフィール参照



名 前…明々

フリガナ…メイメイ

CVイメージ…豊崎 愛生 (けいおん!の平沢 唯役)

年 齢…不明

身 長…112.0cm

血 液 型…不明

誕 生 日…不明

一人称…私

あだ名…メイ

容姿…メイド服を着た羊

武器…不明

職業…神の従者

家庭…不明

好きな食べ物…不明

好きな飲み物…不明

趣味…不明

特技…何もないところでコケる

大切な物…ルカ

苦手な物…ルカの怒り

尊敬する人…ルカ

神の従者その2。

姿形は、メイド服を着た羊のような生き物。
ルカの身の回りの世話をしている。

性格はそそかしく、かなりのドジっ子。
何もないところでよくコケる。
稲葉とは幼馴染。

オリキャラプロフィールその？（後書き）

作者「だいたいこれが、今回の主人公とオリジナル登場人物のプロフィールです」

作者「オリキャラのプロフィールは、章ごとに追加していきますので、楽しみに」

第0話 『大地、恋姫のセカイに行くの事』（前書き）

はじめての人ははじめまして、知ってる人は毎度！ 反省猫です。
ということ、今回は、恋姫無双のセカイで、新たな代行者が駆け
回ります。

相変わらず、駄文ですが、暇つぶしにどうぞ！

第0話 『大地、恋姫のセカイに行くの事』

———大地 side

大地

『参ったな、これは……』

全方向から数百のマフィア達が、大地に銃を向けている。

ここは、あるセカイの裏カジノ。大地は、依頼によりこのカジノの裏で行われてる

裏ファイトの証拠を掴む為に、大地は裏ファイトに参加する為という事で、

潜入に成功。

大地は、裏ファイトのトーナメントを勝ち上がり、チャンピオンのここを運営しているマフィアのボス、ヴラドⅡバキュラと闘う事になった。

一進一退の攻防を制し、辛勝した大地だったが、そのせいで今の状況となっている。

大地

「（まあ、予想は出来たが、さてどうするか）」

大地は今の状況を考えていたその時、1人のマフィアが、

マフィアA

「良くもボスを！ かまわねえ！ こいつを殺っちまえ！！！」

バキューーーーーーン！！！！！！

それを合図に全方向から銃から銃弾が大地を狙って放たれた。

大地は、避けようにも先程の闘いのダメージがあり、動けない。

大地

「（これは、俺死んだな）」

そう言って、目を瞑ったが、いくら待っても銃弾がこない。

ゆっくりと目を開けるとそこは今までいた裏ファイトの会場ではなく、

何もない真っ白い空間だった。

大地

「ここは……どこだ？」

大地がこの部屋を見渡すと

女性

「うふふ、ここは空間と空間の狭間のセカイですよ」

大地

「誰だ！！」

そう言って、大地は構えて、声をした方を見るとそこには、金髪青眼の美しい女性が立っていた。

女性

「ふふ、驚かせて申し訳ありません。私は敵じゃないですよ」

女性は穏やかな声でそう言った。

大地は、訝しげにその女性を見て、

大地

「あんたは一体……？」

女性

「「はい、申し遅れました第1級多世界管理者ルカーツヴァイト」ルミナスと申します。

いわゆる……『神』です（ニコッ）」

そう言って、微笑んだ。

これが、俺と神ルカとの出会いだった。

———大地 side out

明々

「大地様、ルカ様がお呼びです」

羊によく似た♀？の明々が、俺を呼びに来た。

大地

「ああ」

俺は明々に着いて行った。

——あの後、ルカがあのだ銃弾の雨から力を行使して俺をこのセカイに連れてきたらしい。

ある意味命の恩人だ。

そこで俺は、命を救われた礼がしたいと申し出をしたら、

ルカが、

ルカ

「なら私の代わりにセカイを廻ってください（ニコッ）」

と言われたので、最初意味が分からなかったが、

ルカから説明を受けて要約理解した。

ルカは、セカイにでくるイレギュラーの対応とバグを修復する

『エージェント神の代行者』になってくれということらしい。

俺は、二つ返事で

大地

「了解」

と言って、神の代行者エージェントになった。

それからルカに力をもらった。

？不死及び強靱な身体

？身体能力限界突破

？氣の発現及び許容量無限

？創造の力（人体練成は無理でも死者蘇生は可能）

？なでポ、にこポ（これはルカが勝手に付けた）

？毒などの状態異常無効

？今度行くセカイの知識とそのセカイで役に立ちそうな知識

？戦闘能力成長限界突破

もらった力は以上である。

それから少ししてルカのいる場所へと明々と一緒に辿り着いた。

ルカ

「大地、さっそくで悪いのだけど、あるセカイに行ってもらえますか？」

大地

「どんなセカイだ？」

ルカ

「三国志に似てるけど英傑達が全員女性になっているセカイです」

その説明に大地は、

大地

「わかった。そこのセカイの知識を頼む」

即答した。

ルカ

「あの、こういってはなんですが……考えたりしないんですか？」

ルカも即答されるとは思ってなかったようで困った表情でそう言った。

大地

「俺は、君の代わりにセカイを廻るのだろう？」

ルカ

「はい、そうです」

大地

「なら君は俺の依頼主^{クライアント}とだ。

俺は君と契約したようなもんだ。

なら、考える必要はない。

俺は依頼を遂行するだけだ」

ルカは、それを聞いて

ルカ

「なるほど、わかりました。ではお願いします」

大地

「了解」

ルカ

「後、あなたのそのセカイの使命ですが、イレギュラーの対応とバグの修正

はもちろん、英傑たちと特異点の青年を導いてください」

大地

「特異点の青年？」

ルカ

「その特異点の青年は、自分が何をそのセカイで成すか知りません。ですので、あなたに彼の監視及びあなたの考えてその少年を導いて欲しいのです」

大地

「ふむ」

大地は少し考え、

大地

「了解した」

それからそのセカイの知識と色々役立つものをもらい、大地はゲートの中央に進む。

大地

「では、行ってくる」

大地は振り向き、そう言った。

ルカ

「ええ、お気をつけて行ってらっしゃい（ニコッ）」

ルカが見送るのを見て、大地はゲートの中央に入り消えていた。

稲葉

「行ってしまわれましたね」

大地が去った後、稲葉が、ルカにそう言った。

ルカ

「ええ、あの人なら彼女たちとあの少年を救う事が出来るかもしれない」

少し悲しそうな表情でルカが言った。

明々

「ルカさま……」

ルカは、悲しい表情からいつものにこやかな表情に変わり、

ルカ

「稲葉、観測者の二人に連絡を……」

稲葉

「はい！ ルカ様」

そう言って、稲葉はその場から去っていた。

e c o n t i n u e d . . .

t
o
b

第0話 『大地、恋姫のセカイに行くの事』（後書き）

作者「ついにはじまりました!!」

『A・O・G — Agent Of God —
（エージェント）代行者と
三国の恋姫たち』!」

大地「明々に連れて来られたが、ここは？」

作者「という事で、ゲストの室谷 大地さんです」

大地「どうも、室谷 大地だ」

作者「これから彼には、恋姫のセカイで大いに駆け回ってもらいます！」

大地「とりあえず、用件は分かった。だから落ちつけ駄作者」

作者「お前まで駄作者って言うのかyo!!」

大地「それがテンプレなのだろう？」

作者「誰からそれを？」

大地「稲葉に」

作者「稲葉~~~~!!!!!!!! どこじゃあ〜」

そしてその場から去っていく作者

大地「やれやれ、次回予告の時間だ。今回は、俺とある少年と少女達が出会う物語だそうだ。

次回 第1章 第1話 『代行者、天の御遣いに会うの事』
でまた会おう」

作者「稲葉何処じゃ~~~~~!!!!!!」

大地「あ、戻ってきた」

第1話 『代行者、天の御遣いに会うの事』（前書き）

———前回までのあらすじ

エージェント

ルカに代行者を任命された何でも屋の室谷 大地。

ルカの依頼により、恋姫のセカイへとゲートを通り向かうのだった。

第1話 『代行者、天の御遣いに会うの事』

ゲートから出てくるとそこは、見渡す限り荒野だった。

大地

「……さて、着いたのはいいが、ここは———そうか」

ルカからもらったこのセカイの知識により、今いる場所がわかった。

今現在、俺がいるのは幽州啄郡という処の五台山の麓らしい。

大地

「ふむ、これからどうするか……ん？」

空から何かがこちらに向かって落ちてくる。

大地

「流星……か？」

最初は小さかったのにだんだんこちに近づくにつれ、大きくなっている。

大地

「ヤバい！」

そういうと大地を蹴って後方500mに跳ぶ。

ゴオオオオオオオオオオ！！！！

落ちてきた流星は、轟音と共に凄まじい光を放ち、周りの視界を真っ白にした。

大地

「……………」

大地は、目を瞑り光が収まるのを待つ。

数分後、薄目を開け、光が収まったのを確認すると目を開き、流星が墜ちた場所を見る。

すると一人の白い制服を着た青年がうつ伏せに横たわっている。

大地

「ふむ、あれがルカが言っていた特異点か」

そう呟くと墜ちてきた青年の傍に駆け寄った。

大地

「おい、大丈夫か？」

青年は気を失っており、目を覚まさない。

大地

「とりあえず、頬を叩いてみるか」

そういうと青年の頬を軽く叩く、

ペシ！ ペシ！

大地

「おい、起きろ！」

青年

「ん……」

ペシ！ ペシ！

大地

「しっかりしろ」

青年

「んん……」

ペシ！ ペシ！

青年

「んっ……」

青年はようやく目を覚ました。

大地

「……おはよう」

青年

「ん……？ えー……っと、おはよう………ございます へっ？」

青年は、今の状況が分からないと言った感じである。

大地

「俺は、室谷 大地。お前の名前は？」

青年

「北郷……一刀です……ここは？」

一刀と名乗った青年に大地は、この場所の名前を言った。

大地

「幽州啄郡の五台山の麓らしい」

一刀

「らしいって――」

大地

「俺も今着いたばかりなんでな」

そう言って、大地は淡々とそう言った。

大地の言葉を聞いて一刀は大地の格好を見た。

赤いジャケットコートに黒いタンクトップ、赤いカーゴパンツ胸にはドッグタグを身に着けており、

腰には、刀を差している。

一刀

「一つ質問なんですが、ここは日本じゃ？」

一刀の質問に

大地

「違うな、ここは後漢時代の中国に似たセカイだ」

それを聞いて、一刀は驚く。

一刀

「ええええええ！！！！！」

大地

「とりあえず、落ちつけ」

大地の落着き払った雰囲氣に

一刀

「いやいやいや！今の聞いたら誰でも驚きますって！」

一刀の突っ込みに

大地

「そうなのか？　まあいい……とりあえず、順だって説明してやる。このセカイがどういう処なのかなあ」

そういうと二人は地面に座り、大地が説明をした。

一刀
side

学校から帰る途中、突然意識を失った俺。

次に目を覚ました時には、目の前に見知らぬ荒野と見知らぬ男がいた。

男の名前は、室谷 大地さん。

俺よりか4つくらい年上くらいの感じの人だ。

で、大地さんにこの場所を聞くと俺は驚かずにはいられなかった。

幽州啄郡！後漢時代の中国に似たセカイだつてえええええ！！！！！！

!!!!

なんで、俺がそんなことに……。○

俺が動揺してるとどうやら大地さんがこのセカイの事を教えてくれるらしい。

とりあえず、頭を切り替えて話を聞こう。

それからどうするか考えるんだ。

俺は、大地さんの話に耳を傾けるのだった。

一刀 side out

大地は、このセカイの事を一刀に説明した。

一刀

「そんな……俺はなぜ、ここに」

一刀が動揺していると

大地

「それについては、俺は知らないが、俺はある依頼でこのセカイに来た」

大地は、一刀の事を知ってたが知らない感じでしゃべり、

一刀

「ある依頼って？」

一刀から訊ねられた。

大地

「一応、これは依頼なんでな、簡単に話す訳にはいかないんだ。

とりあえず、君に危害を加える事はまずない。これだけははっきりしているから

心配する事はない」

それを聞いて一刀は、

一刀

「いや、依頼なら仕方ないです。それに大地さんいなかったらこのセカイでどこいっていいかわからないので」

その言葉を聞いて大地は感心する。

大地

「（お人よしだが、それでも状況を見極める力はあるか）」

大地がそんな事を思っていると

一刀

「大地さん、どうしました？」

大地

「……いや、何でもない、とりあえず、村かどこか人のいる場所を目指すか」

そう言って歩き出すと

一刀

「はい！」

一刀は、大地の後ろを着いて行こうとしたその時、

??

「お待ちください！！」

大地・一刀

「ん？」

二人が振り返ると黒髪の綺麗な女性が俺達を呼び止めた。

女性

「私の名前は関羽雲長と申します。お二人は、天の御使い様と神の代行者様ではありませんか？」

大地と一刀は向きあって、その後

大地・一刀

「はあああゝゝ？」

と叫んだのだった。

d
…
…

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

第1話 『代行者、天の御遣いに会うの事』（後書き）

作者「ということで、一刀君と合流です」

大地「なあ、これから蜀ルートで話進めるのか？」

作者「いや、蜀ルートを基軸に他のルートを混ぜるよ」

大地「そんなんで話が纏まるのか？」

作者「なんとかやってみるさ」

大地「まあとりあえず、がんばれ」

作者「さて、今回のスペシャルゲスト北郷 一刀君の登場だ」

一刀「どうも」

作者「とりあえず、ネタバレだが、お前を徹底的に鍛えます」

一刀「えええ!!! どれくらい？」

作者「夏候惇くらい」

一刀「まじで〜!!!」

作者「とりあえず、性欲にいかないように俺が調整してやろう」

一刀「いやだーーーーー」

そして作者に連れて行かれる一刀。

それを呆れながらも見送る大地

大地「行ってしまった……。とりあえず次回予告だ。

俺達は、蜀を作ることになる仁王 劉備に出会うのだが……。
次回 第1章 第2話『大地、劉備に理想の厳しさを教える
の事』でまた会おう」

一刀「ぎゃあああああああ!!!!!!」

大地「合掌……」

チーーン!!

第2話 『大地、劉備に理想の厳しさを教えるの事』（前書き）

大地は、恋姫のセカイに着いた直後、北郷 一刀と出会う。

大地は一刀にこのセカイを説明し、一緒に村がないか探しに行こうとする。

関羽と名乗る美少女に声をかけられるのだが……

第2話 『大地、劉備に理想の厳しさを教えるの事』

大地と一刀は、少女の名乗った名前に驚いた。

二人は小声で話しあう。

大地

「おいおい、関羽ってあの劉備に仕えてた結構有名な英傑だよな？」

一刀

「ええ、そうです。美髯公とか呼ばれる大柄な髯蓄えたおっさんの
はずですよ？」

一刀はそう言って、横目で関羽を見るとどうみても髯が生えたおっ
さんではなく、

かなりの美少女だ。言うなれば美髯公ではなく美髪公と言ったほう
がいいだろう

それくらい綺麗な長い立派な黒髪をしている。

一刀

「これがこのセカイなのか……」

大地

「とりあえず、話を聞いてみるか」

一刀は大地の言葉にコクッと頷いた。

大地と一刀は話し合いを終え、再び関羽を見る。

大地

「お待たせした……貴殿が関羽殿として、なぜ俺達がそうだと思っ
たんだ？」

大地の質問に

関羽

「それは、ある占い師のお告げに

“ 国が腐敗し、乱世乱れる時、流星と共に白い衣を纏った天の御
遣い現れる”

それと、

“ セカイに危機が迫る時、赤き衣を身に纏った神の代行者現れ、

正しき道を示すだろう”

と言っていたのです」

それを聞いて、大地は、

大地

「なるほど……つまり俺達がその占い師が言っていた事と

同じ姿をしていたから声をかけたんだな」

関羽

「はい、それと先程の流星もこちらの方角に墜ちるのをみています
ので……」

それを聞いて、一刀は意味が分からないとばかりに首を横に傾ける。

一刀

「流星？ そんなのあったっけ？」

大地

「お前は気絶していたから知らないだろうが、その流星が落ちた処にお前が倒れていた」

一刀

「なんだって!？」

大地

「それで俺達をどうしようというんだ、関羽？」

大地は驚いている一刀をスルーし、関羽に訊ねる。

関羽

「私の主の劉備様に会っていただけないでしょうか？」

大地

「（一度、会ったほうがいいか……）」

大地

「では、案内をお願いしよう……一刀、行くぞ」

そのまま放置していた一刀を呼ぶと

一刀

「あ、ああ……わかった」

そう言って、関羽と大地の後を一刀は着いていった。

———15分後、

関羽の案内を受けながら大地と一刀の二人は、ある川の畔に着いた。
どうやら、ここが目的らしい。

ピンク髪の女の子

「愛紗ちゃん〜ん」

ピンク髪の女の子が手を振りながら誰か呼んでいる。

関羽

「桃香様〜」

そういつて、関羽も女の子の名前を呼ぶ。

ピンク髪の女の子と赤髪ショートのかわいらしいお転婆そうな小さい女の子が、

関羽の元に駆け寄ってくる。

ピンク髪の女の子

「愛紗ちゃん、この人達が……？」

関羽

「ええ、天の御遣い様と神の代行者様です」

そう女の子に言うと女の子は、一刀と大地をその大きな瞳で見た。

ピンク髪の女の子

「はじめまして、私の名前は、姓は劉、名は備、字は玄德といいます」

続いて、赤髪ショートの子が

赤髪ショートの子

「鈴々は、姓は張、名は飛、字は翼徳なのだ」

どうやら、二人があ有名な劉玄德と張翼徳らしい。

一刀

「（なんか想像と違うんだけど）」

大地

「（ここはそう言うセカイだ、いい加減慣れろ……）」

二人がアイコンタクトで話していると

劉備

「あのう……」

劉備がこちらを不安そうに上目使いでこちらを見ている。

一刀・大地

「（うっ……かわいい……）」

たしかに劉備も然ることながら関羽・張飛共に美少女と言われるくらい可愛い。

大地は、咳払いし、

大地

「こほん、失礼したはじめまして、室谷 大地だ。
こっちは、北郷 一刀」

一刀

「どうも、はじめまして」

と、一刀は軽く頭を下げる。

大地

「とりあえず、先に説明しておくが、姓が室谷、名が大地、字はない」

大地がそう説明すると一刀も

一刀

「俺も姓が北郷、名が一刀だ、同じく字はない」

関羽

「そうですか……『天のセカイ』ではそれが普通なのですか？」

大地

「ああ……ここみたいに『真名』もない、『真名』に当たるのは俺達で言えば、大地と一刀だな」

それを聞いて女の子3人は驚いている。

関羽

「では、あなた達は、私たちに『真名』を預けてくれたのですか？」

関羽は、驚いた表情で大地達に聞いた。

一刀

「真名？」

一刀は関羽にたずねると

関羽

「はい、我等の持つ家族や親しき者にしか呼ぶことを許さない、神聖な名のことです」

一刀がそれを聞いて事の重大さに驚いていると

大地

「なら、その前に劉備殿……」

いきなり大地が劉備の名を呼んで、

劉備

「ふぁい！」

どうやら舌を噛んだらしく恥ずかしそうにしている。

大地はそれにちょっと呆れながらも

大地

「————君が目指すものは何だ？」

大地からの質問に一瞬、劉備は驚くが、すぐに真剣な表情になり、

劉備

「……みんなが笑顔で幸せに暮らせる国を作ることです」

劉備はそう答えた。

大地

「……なら覚悟はあるか？」

劉備

「えっ……？」

大地

「みんなとは、全部の人という事だろ？」

劉備

「はい……」

大地

「それならば、みんなが笑顔で幸せになる事はまずない……」

劉備

「！」

関羽

「何をっ！」

関羽が、大地に詰め寄ろうとするが、

劉備

「愛紗ちゃん、待って!!」

劉備が関羽を制す。

関羽

「でも、代行者様は、桃香様の理想を……」

張飛

「そうなのだ!」

張飛は蛇鉾を持って怒っている。

劉備

「代行者様は何か考えがあっていつてるんだよ、だから続きを聞こう……」

劉備は少し悲しそうな表情で関羽と張飛を宥める。

関羽

「桃香様がそうおっしゃるなら……」

張飛

「わかったのだ……」

劉備

「続きをお願いします」

劉備は真剣なまなざしで大地を見る。

大地

「（ほう、いい目をしている……　この子はいいい王になる）」

大地は劉備の事を感心すると

大地

「では、話を続けよう……そもそも君は、何の犠牲も出さずに国を作るつもりか？」

劉備

「犠牲……それって!!」

大地は、淡々と語っていく。

大地

「まず国を作るのには、まず自分達の知名度を上げなければならぬ。い。

そこで俺達の事を祭り上げて、名声とかと手に入れようと思ったのだろう？」

劉備

「はい……」

大地

「まあ有名になれば、人が集まってくる……、そしてもっと知名度を上げて有名になるには、

闘わねばならない。ここまではわかるか？」

劉備

「はい……」

大地

「当然、その闘いで死傷者とか出る。みんなが笑顔で幸せになるっていうのは、まず無理だ。

死んだ人、傷を負った人にも家族がいる。そして、闘う相手にもそれを悲しむ家族がいる」

大地

「つまり、君の言ってるのは、そう言う矛盾を持っているんだ。まさに絵空事だ。

それでも直、君は死んだ人達を乗り越え、自分も生き残り、その理想を叶える自信はあるか？

「どうなんだ、劉玄德!!」

劉備

「私は……………」

劉備、辛そうな悲しそうな表情で両拳を強く白くなるまで握って、その場に立ち尽くしている。

関羽

「桃香様……………」

張飛

「お姉ちゃん」

二人は心配そうに劉備を見ている。

一刀 side

大地は、劉備に自分の理想の矛盾を伝える為、あえて悪者になった

事を

気付いていた。

たしかに“みんなが笑顔で幸せになれる国”なんて実際難しいのかもしれない

というか無理だ。

いつかこの矛盾は、劉備にとって重い十字架になる。

その時になる前に事前に劉備にその事を伝え、考えさせて答えを出させようと思っているのだろう。

とりあえず俺は、大地と一緒に劉備の答えを待つことにした。

協力するのは、その答えを聞いた後だ。

一刀 side out

それから30分後—————

劉備の口が開いた。

劉備

「たしかに……代行者様が言う通りなのかもしれません。でも、このまま放っておいたら、もっと悲しむ人達が現れる」

劉備

「だから私は、自分の理想を叶えます。どんなことがあっても、

——後悔だけはしたくありませんから!!」

そう、強い意志が籠った瞳で大地を見る。

大地

「……わかった。君の理想を手伝おう……」

劉備

「えっ……、いいんですか……?」

大地

「ああ……、君のその答えを聞きたかった」

そういつて、大地が微笑んだすると

劉備・関羽・張飛

／／／／／／／／／／！！！！！！！！」

大地

「どうした?」

劉備

「(はうゝ、今のは反則だよゝ)」

関羽

「(私ともあろう者が、微笑み一つでここまで心を乱すとは!?)」

張飛

「(はにゃゝん、なんか顔が熱いのだ)」

大地

「？」

大地はなぜ3人が顔が赤いのかわからなかった。

それを見ていた一刀が腕をすくめ、ヤレヤレとポーズを取る。

劉備は、息を整えて、笑顔で

劉備

「ありがとうございます。私の真名をあなた達に預けます」

大地

「……いいのか？」

劉備

「はい！ 私の真名は『桃香』と言います。これからよろしく願いします、ご主人様達♪」

大地・一刀

「ご主人様あゝ？」

桃香

「はい！ 私たちの主人ですからご主人様です！」

その言葉に大地と一刀はアイコンタクトで会話する。

大地

「（おいおい、ご主人様って……）」

一刀

「(どうします?)」

大地と一刀は、どうしたものかと考え、一つの答えを出す。

大地

「はあゝ、じゃ、それでいいよ」

一刀

「うん」

二人は、彼女の満面の笑顔を見て、承諾するしかなかった。

関羽も先程の難しい顔から優しい顔になり、

関羽

「桃香様が預けたのなら、臣下の私たちも預けないわけには行けません。」

私の真名は『愛紗』です。愛紗とお呼びくださいご主人様」

大地

「ああ……」

一刀

「わかった」

張飛

「鈴々は鈴々なのだ！ よろしくなのだ、お兄ちゃん達！」

一刀

「よろしくな、鈴々」

一刀が鈴々の頭を撫でる。

大地

「よろしくな……」

一刀に続いて、鈴々の頭を撫でた。

鈴々

「ふにゅあああ〜」

鈴々は目を細めて喜んでいる。その姿はまるで猫のようだ。

桃香はその光景に指を加え、羨ましそうに

桃香

「いいな〜、私も頭撫でてもらいたいな〜」

愛紗

「桃香様あ〜」

愛紗は、困った表情をしてそう言った。

こうして、大地と一刀は、劉備達の仲間になったのだった……

continued……

to be

第2話 『大地、劉備に理想の厳しさを教えるの事』（後書き）

作者「ということで、桃香の仲間になりました」

大地「それはいいのだが……これから話はどうなるんだ？」

作者「それはですね、次の話で分かると思いますよ」

大地「そうなのか？」

作者「次の話は、大地があの人に出会います」

大地「あの三人？」

作者「次回、第3話『大地、昇り龍に出会うの事』でお会いしましょう」

大地「昇り龍？誰だそれ？」

??「それは、次回のお楽しみですぞ」

大地「お前は一体……」

第3話 『大地、昇り龍に出会うの事』（前書き）

——前回までのあらすじ

大地と一刀は、関羽に案内され、劉備達と出会った。

そこで、大地は、劉備の理想の矛盾と危うさを感じ、劉備を試す。劉備もそれに応え、何事があっても自分の理想を貫く事を決める。そして、大地達は、劉備達に協力することになるのだが……

第3話 『大地、昇り龍に出会うの事』

大地

「うゝん……」

桃香

「どうしたの？ ご主人様」

大地は軽く唸っている。

大地

「いやな、これからの事でな……」

一刀

「これからの事？」

大地

「まず、資金の問題。今俺達はお金がない。人雇うにしても先立つものがないとな」

愛紗

「そうですね……」

鈴々

「それに関しては鈴々は何もできないのだ」(汗)「

鈴々は苦笑いしてそう言った。

一刀

「うゝん、俺の鞆の中に売れそうな物あるかな」

そういうと一刀は自分の鞆を漁り始めた。

一刀

「お！ いいものがあつた」

そう言って、カバンから取り出したのは、無地のノートとボールペンとシャーペンだった。

愛紗

「これはなんですか？」

愛紗は、ボールペンを手に持って、一刀に聞く。

一刀

「これはボールペンと言って、墨が無くてもかける筆みたいな物かな」

大地

「ほう、それを売ればお金ができるな。ちょっと貸してもらっていいか？」

一刀

「いいけど……何するのんだ？」

一刀からノートなどを受け取ると、大地は目を瞑り、

大地

「我、創成の力よ。わが手にある物を増やさん!!」

「とりあえず、大地さんがバグキャラというのがわかったよ」

大地

「失礼な……まだ他にも俺以上のやついるぞ」

桃香

「嘘……ご主人様より凄いなんて」

愛紗

「その人は一体……」

大地

「俺の師匠さ……もう長い事逢ってないがな」

そういつて、大地は遠くを見つめた。

一刀

「とりあえず、これどこで売るの？」

大地

「愛紗、大きな街までどれくらいだ？」

愛紗に訊ねると

愛紗

「ここから、四里（15・708km）離れた所です」

大地

「四里か……わかった、俺が行ってくる」

一刀

「行ってくるって……この大荷物でどうやって?」

大地

「こうするのさ!」

そういつて、自分の腰のバッグにノートかを詰め出したが、

不思議な事にあんなにあった沢山の物がその小さいバッグに入って行く。

一刀

「これってもしかして……」

大地

「ああ、このバッグは俺の能力の一つ、『無限倉庫』に繋がっている。

人も入れるぞ」

一刀

「まじで!!!」

大地

「とりあえず、お前達もこのバッグに入れ、置いてくわけには行かないしな」

愛紗

「しかし……」

どうやら愛紗はバッグに入ることには抵抗があるようだ。

大地

「はあゝ、仕方ない……」

大地はそう言いながら、一刀の首根っこを掴み、バッグの中に入れる。

一刀

「ええええ!!!! ちょ、ちよつと!!!!」

大地

「心配するな……酸素はある」

一刀

「そういう問だ……」

一刀はあの小さいバッグの中に入った。

すると大地は桃香達のほうを振り向き、

桃香

「ひいいい!!!!」

桃香達もバッグに入れるのだった。

桃香達がバッグに入って数分後——

大地

「さて、いくか…… ハッ！」

大地は両足裏に氣を貯めて、一気に爆発させ大地を蹴って、大きくジャンプし移動する。

大地はかなりの速さで四里の半分の二里まで進むと

ある村の前を通った。

大地

「これは……」

どうやら盗賊に襲われている最中のようだ。

大地

「仕方がない……これも縁だ」

そういつて、大地は村に入っていた。

家は燃え、女子供も関係なしに死体が地面に転がっている。

村の中央まで進むところを襲っている30人ほどの盗賊達がいた。

盗賊頭目

「なんだ、おまえは？」

盗賊B

「へっへっへ！ お前もこいつらみたいに死にたいか？」

盗賊C

「ビビって、声も出ねえか、ギャハッハッハ！」

大地

「……黙れ」

大地は、凄まじい殺気を放ちながら低い声でそう言った。

盗賊達

「ヒィ！！！！！！」

盗賊達は殺気を放っている大地の雰囲気にもまれ震えている。

盗賊D

「か、かまわねえ！ やっちまえ！！！！」

そう言っで一斉に盗賊達が襲ってきた。

すると大地は、そのままの体勢で腰に手を当て、刀を抜きすぐに鞘に戻す。

チャキ！

チャキン！

それは一瞬の出来事だった。

盗賊頭目

「おいおい、さっきのはこけおどしか？」

盗賊B

「怖くて動けねえか？ ギャハハ」

盗賊C

「はったりかよ！」

盗賊D

「とりあえず、死ねえ」

盗賊達の罵詈雑言を無言で聴きながら、大地はこう呟いた。

大地

「————もう終わった」

その瞬間、盗賊達から血飛沫が揚がり、30人の盗賊達の身体はバラバラになった。

大地は盗賊達が全滅したのを確認し、ここを去ろうとしたそのとき、

大地の後ろから

??

「待たれよ！」

一人の槍を持った白い服の美少女が大地を呼び止める。

大地

「……何かな？」

??

「この惨状は、貴殿がやったことか？」

大地

「ああ、（盗賊達は）俺がやった……」

??

「ならば、この村の人の無念、この趙子龍が晴らしてくれる！

いざ、はああ——————っ！」

そういつて、趙雲は、背丈よりも長い槍で目にも止まらぬ速さの鋭い突きで、

大地を狙ってくる。

大地

「チィ！」

そういつて、刀を抜き、その当たれば確実に致命傷になりそうな突きの1つ1つを

刀で、受け流して行く。

趙雲

「はいはいはい——————っ！」

直も続く連続の突きに大地は、

大地

「はああああ…… 外装変換『源氏』！」

赤いジャケットコートが、朱塗りの立派な武者鎧に変化する。

趙雲

「なっ！」

趙雲は驚きながらも突きを止めようせず、さらに先程よりスピードを上げ、

大地に突きを放ってくる。

そして、趙雲の突きが大地に当たる。

趙雲

「当たった——何ィ————！」

たしかに趙雲の突きは大地に当たったのだが、

突きは、鎧で阻まれ、大地にはダメージがない。

さらに驚いた事に趙雲の恐ろしくも速い突きで突かれたのに

大地の鎧に傷が一つも付いていない。

趙雲

「どういうことだ……その鎧は一体……」

大地

「こいつは、特別せいだな。人の攻撃は通じないんだ」

趙雲

「それなら！」

趙雲は、槍を構え、覇気を溜める。

趙雲

「はああ——————！」

大地

「なら、こちらも遠慮しない……」

そういつて、刀を鞘に戻し、腰を落とし居合の型に構える。

趙雲

「ではいくぞ！ はい——————っ！」

趙雲は、素早い動きで大地との間合いを詰め、必殺の一撃を

大地に喰らわせようとする。

大地も趙雲が自分の制空権に入るのを待ち、構えを解かない。

両者の距離が徐々に近づいた瞬間

??

「ちょっと待って下さい、星ちゃん！」

頭になんか変な置物をおいた少女が、大地と闘いを演じている少女に呼び掛ける？

趙雲

「なっ……風？」

―――15分後

趙雲

「誠に申し訳ありませぬ」

そういつて、趙雲は、大地に土下座をして謝る。

大地

「俺もいい方が悪かった。すまない……」

??

「まあまあ、済んだ事じゃないですか？　とりあえず、お兄さんお名前は？」

大地

「俺は、室谷　大地だ」

??

「姓が室、名が谷、字が大で真名が地でしょうか？」

眼鏡をかけたしっかりした少女が、そう訊ねる。

大地

「いや、姓が室谷、名が大地だ。字はない。真名はしいていえば大地だ」

それを聞いて3人は驚く。

趙雲

「では何か、あなたは見ず知らずの私達に真名を預けてくれたのか

「？」

大地

「ああ、そういうことになるな」

趙雲

「では私も姓は趙 名は雲 字は子龍 真名は星です」

そう言って、大地に星は真名を預ける。

大地

「いいのか？」

星

「はい、それに私は先程の闘いであなたの武に惚れました。ぜひあなたのお供にしてもらえませんか？」

大地

「ふむ、わかった。仲間が多いに越したことがないし、君ほどの武があれば、こちらも歓迎しよう」

「??」

「じゃ、私もお兄さんに真名を預けるとしますかねー」

それを聞いた眼鏡をかけた少女が、その言葉に驚く。

「??」

「風、いいのですか？」

「??」

「はい、このお兄さんおもしろそうなので」

その返答を聞いた眼鏡の少女はため息をつき、

??

「はぁ〜、わかりました。私もこの方に真名を教えます」

大地

「……君達もいいのかい？」

??

「はいー」

??

「私がかまいません」

大地

「わかった……」

??

「じゃ、私から姓は程 名は立 字は仲徳 真名は風ですー」

続いて

??

「姓は郭 名は嘉 字は奉考 真名は稟です」

大地

「ああ、よろしくな」

そう言って優しく微笑む、その瞬間、

星は顔を赤くし、凜は盛大に鼻血、それを見て風は口に手を当て笑っている。

こうして、大地に3人の仲間ができた。

星

「主の微笑みは凄いですな——／／／（テレ）」

大地

「主？」

星

「左様、私は今度からそう呼ばせてもらいます」

凜

「わ、私は、大地様とお呼びします」

凜は、首をトントンしながらそういった。

風

「私はお兄さんでー」

大地

「わかった。好きに呼べばいい」

星

「それで、主はお一人で旅を？」

大地

「いや、あと4人仲間が……あ」

大地はバッグに入れた一刀達をすっかり忘れていたのだった……

t o b e c o n t i n u e d ……

第3話 『大地、昇り龍に出会うの事』（後書き）

作者「ということで、いかがだったでしょうか？」

大地「とりあえず、新しく3人仲間になったな」

作者「あいあい、作者は凜と風が好きなので、蜀勢に入っていただきました」

大地「それでか……じゃ、他にも引き抜くのか？」

作者「それはもう、あとオリジナルの人達も出てくるよ」

大地「それは楽しみだ」

作者「まあとりあえず、次回予告してくださいな」

大地「了解……、次回、第4話『大地、公孫賛に会うの事』」

作者「普通の人登場です」

公孫賛「普通って言うなっ!!」

作者「お楽しみに」

第4話 『大地、公孫賛《普通の人》に会うの事』（前書き）

大地は軍資金調達の為、大きな街に移動している途中、盗賊に襲われていた村を発見し、

盗賊達を退治したが、大地の言動から勘違いした趙雲が大地を倒そうと襲いかかってくるが、

趙雲の連れの二人により、誤解は解け、三人は大地の仲間になるのだった……

第4話 『大地、公孫賛《普通の人》に会うの事』

目的の街までもう少しの茂みで、大地は腰のバッグを開いたすると、1人の青年と3人の女の子が

現れる。

星達は、目を皿のようにして驚いている。

星

「主、これは一体……」

風

「これは驚きました」

稟

「大地様は、妖術使いですか？」

大地

「これは、妖術じゃないさ。このバッグは何でも入るんだ。それこそ船とかもね……」

星

「ほほう、それは便利ですな！」

星が目をあやしく輝かせている。

一刀

「大地さん、俺達がバッグの中に入った間に何があったの？」

それとその人達は？」

大地は、一刀の質問に淡々と答える。

大地

「目的の街に行く途中に盗賊に襲われている街があつてな、盗賊退治していたら

その星に勘違いされてな。なんだかんだで仲間になった」

一刀

「なんか、色々突っ込みたいけどとりあえず自己紹介かな？」

俺の名前は北郷 一刀。姓が北郷で名が一刀。字はないし、真名もない」

桃香

「私の名前は劉備玄德。真名は桃香だよ、よろしくね」

愛紗

「私は、関羽。字は雲長。真名は愛紗だ、よろしくたのむ」

鈴々

「鈴々は、張飛なのだ。字は翼徳。真名は鈴々なのだ！」

一通り、一刀達の自己紹介がすむと続いて星達が自己紹介する。

星

「私の名前は、趙雲。字は子龍。真名は星だ、よろしく」

風

「……ぐう」

稟

「寝るなっ！」

風

「……おおっ？」

風

「私の名前は、程ていいく？といひます。字は仲徳 真名は風です。よろしくですよー」

稟

「私の名前は、郭嘉。字は奉考。真名は稟と申します。皆様よろしくおねがいします」

大地

「風、名前が前に聞いたのと違うが？」

風

「元々、士官したときに改名しようと思ったのでー」

大地

「そうか、わかった……」

一刀は、3人の名前に驚いている。

一刀

「昇り龍趙子龍に神算鬼謀の郭奉考それと奇策妙計程仲徳だっ！
！」

一刀の言葉に星達は、

星

「ほほう、私の名前もそこまで世に知られているとは……」

星は笑みを浮かべ、

稟

「神算鬼謀……人知の及ばないような、すぐれた巧みな策略。いい言葉ですね」

凜の眼鏡が怪しく光る。

風

「奇策妙計ですかー。お兄さんうまいこといいますねー」

風もうれしそうだ。

宝？

「おうおう、兄ちゃん、風を喜ばすなんてやるじゃねーか」

どう聞いても風の声の風の頭に乗っている彫刻がそう言った。

それを聞いて、鈴々が風に

鈴々

「風の頭に乗っているのはなんなのだ？」

そう訊ねると

宝？

「俺の名前は宝？。まあ風のお守とおぼえておいてくれい」

風

「冗談は、その存在だけにしてほしいのですよー」

宝？

「存在自体否定かよっ！」

大地

「……とりあえず、仲良くしてくれ」

全員

「はい！（はーい）」

そのあと、桃香の目標や決意を聞き、三人は、桃香に仕えてくれると言う事になった。

それから、大地達は街へとたどりつき、大地と愛紗それと凜がノートなどを売り、

結構な額のお金が大地達の懐へ入った。

大地

「結構な額になった」

凜

「はい、これなら結構な人数雇えそうです」

鈴々

「ご飯もいっぱい食べれるのだ」

一刀

「でも一応、ここの偉い人に一言言ってから募集かけないか？」

愛紗

「たしかにご主人様の言う通りですね」

風

「……たしかここの太守は公孫賛ですねー」

桃香

「白蓮ちゃんなら私の友達だけど？」

それを聞いてみんな驚く。

一刀

「なら、会いに行ってみるか」

稟

「はい、桃香様の友人であるならば話が進めやすくなりますし」

風

「とりあえず、公孫賛さんは、『普通』でいい人で有名ですからねー」

大地

「じゃ、このまま行ってもなんだし、俺にいい考えがある」

愛紗

「いい考えとは？」

大地

「みんな耳を貸せ……」

そういつて、全員、大地の話に耳を傾ける。すると、

大地の案はこうだ。

今現在、公孫賛は盗賊団5000人と交戦間近な状態だ。

しかし、公孫賛軍は約3000人。……いくら相手は雑魚達でも

この人数の差はとても大きい。

そこで、この戦でもっとも重要なのが、部隊を率いる隊長の質だ。

公孫賛の兵は大半、農民の次男や三男などである。兵の質は盗賊達と

あまち変わらないまさに五分五分だ。となれば必然として

兵を率いる物の質こそが最重要なのだ。

愛紗達に聞いたところ、まだ兵を率いた事が無いらしいが、

彼女達は後に三国でその名の知らない英傑になるのだ。

しかし、例えば彼女達がそうであっても現状の兵隊がいまままでは、

公孫賛には信じてもらえない。

そこで、兵隊のフリをしてくる人達をそうだな～百人雇って、

公孫賛の城に行くまで着いてきてもらう。そうすれば、

門番は、俺達が兵を率いて訊ねてきてくれたと勘違いし、公孫賛に

その事が伝わるといった感じだ。

桃香

「えええ!!!」

風

「お兄さんも策士ですね」

稟

「はい、それならはったりとしていけるかもしれせん」

愛紗

「しかし……」

一刀

「愛紗、仕方ないよ。俺達はまだ弱小なんだから」

愛紗

「……わかりました。釈然としませんが」

一刀が大地の案に釈然としない愛紗を宥める。

大地

「それでは、この案でいいか？ みんな」

全員

「御意！」

それからすぐに募集をかけ、100人ほど人が集まった。

集まった人に兵隊の格好をさせ、

俺達は、公孫賛の城に向かうのだった……

数分後、公孫賛の門前に辿り着き、

しばらく待たされたものの、下にも置かない扱いで玉座の間へと案内された。

侍女らしき女性の誘導に従って、玉座の間へと足を踏み入れると

公孫賛

「桃香！ ひっさしぶりだなー！」

一人の女性が玉座から離れ、桃香に近寄ってくる。

桃香

「白蓮ちゃん、きゃー！ 久しぶりだねー♪」

公孫賛と桃香は、再会を喜んで抱き合っている。

公孫賛

「盧植先生の私塾を卒業して以来だから、もう三年ぶりかー。元氣

「それで何よりだ」

桃香

「白蓮ちゃんこそ、元気そうだね♪ それにいつのまにか太守様になっちゃって。」

「すごいよー」

公孫賛

「いやあ、まだまだ。私はこの位置で止まってなんかいられないかな。」

「通過点みたいなもんだ」

桃香

「さっすが秀才の白蓮ちゃん。言う事がおつきいなー」

大地は公孫賛をじーと見て観察する。

公孫賛……たしかにいい太守なんだろうが……特別何か持っているって感じじゃない。

はっきりいって『普通』って感じだな。

他のみんなもそう感じたようだ。

公孫賛

「今、誰か私の事を『普通』って言わなかったか？」

桃香

「ん？ 誰も言ってないよ？」

桃香は、不思議そうに小首を傾げる。

公孫贊

「……気のせいか」

大地は思った。

自覚あるんだな」と。

公孫贊

「……それより桃香の方はどうしてたんだ？
全然連絡が取れなかつたから

心配したんだぞ？」

桃香

「んとね、あちこちで色んな人を助けてた！」

公孫贊

「ほおほお。それで？」

桃香

「今は、ご主人様達と一緒に旅してるよー♪」

公孫贊

「ご主人様く？」

そう言って、こちらの方を見た。

公孫贊

「ご主人様ってどっちだ？」

一刀と大地を両方指を差す。

桃香

「両方だよ♪ 二人とも凄いんだよ。」

管輅ちゃんお墨付きの天の御遣い、北郷 一刀さんに
神の代行者の室谷 大地さん♪」

公孫贊

「管輅？ 管輅って、あの占い師のか？」

桃香

「うん♪ 流星と共に天の御遣い現れ、神の代行者、五台山の麓に
舞い降りるって

占い、白蓮ちゃんは聞いたことない？」

公孫贊

「聞いた事はある。最近、この辺りではかなりの噂になっていたからな。

しかし眉唾ものだと思っていたけど……」

桃香

「一刀さんと大地さんは本物だよ！」

公孫贊

「ふーん。……」

そういうと、一刀と大地を公孫贊はじっくり上から下まで、
ジロジロと見つめてくる。

一刀

「な、なに……？」

一刀はたじろいでいるが大地は落着いた感じにいる。

桃香

「あー！ 白蓮ちゃん、疑ってるの！」

桃香は、公孫賛にプンスカ怒っている。

公孫賛

「いや、疑ってる訳じゃないって。桃香が今まで一度もウソついた事無いし。

桃香の言う事は信じるよ。大地のほうはそれっぽい感じがするが、北郷だっけ？ こっちはそれっぽくないなあと思ってさ」

一刀

「まあ、普通そう言う反応だよね」

一刀は苦笑いしてそう答える。

桃香

「そんなことないよ。私には見えてるもん。ご主人様の背後に光り輝く後光が！」

一刀

「……ま、後光があるかないか別として、一応、桃香達と行動を共にしているんだ。

宜しく、公孫賛さん」

大地

「よろしくたのむ…… 公孫贊」

公孫贊は屈託なく爽やかな笑みを浮かべ、

公孫贊

「そうか。桃香が真名を許したのならば、一角の人物なのだろう。

……ならば私の事も白蓮ばいれんで良い。友の友なら、私にとっても友だからな」

俺達は思った。

普通だけど……いい人だなあつと

公孫贊

「誰だ！『普通』って言ったのは！」

その反応に俺達は、苦笑いするしかなかった。

それから俺達は白蓮に自己紹介すると事情を話し、白蓮の盗賊団退治の手伝いをする事になった。

ちなみに俺の策は白蓮にバレていた。

太守になる人だ。それくらい見抜けて当たり前か。

俺達は、盗賊団と対峙するまで、しばしの休息の時を過ごすのだった……。

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:

t
o
b
e

第4話 『大地、公孫賛《普通の人》に会うの事』（後書き）

作者「ということで普通の人、ハムこと、白蓮でした」

白蓮「普通って言うな！」

作者「まあまあ、話進めば君も普通じゃなくなるから」

白蓮「え……？」

作者「ちゃんと魔改造するよ。強さとかは後お楽しみ」

白蓮「やつと……やつと……『普通』とはおさらばか……長かった……長かった……」

作者「おお、よろこんどる、よろこんどる」

白蓮「それにしても私専用の武器ってでてるのか？」

作者「それならもう少ししたらアンケート取るからもうちょい普通の剣で待ってちょ」

白蓮「わかった。やつと私専用の武器が♪」

作者「喜んでゐる所悪いけど、次回予告よろしく」

白蓮「わかった！ 次回 第5話 『一刀、戦場の厳しさを知り大地に弟子入りするの事』で

また会おう！ 次回も私が出るぞ」

作者「では次回までさようなら」

第5話 『一刀、戦場の厳しさを知り大地に弟子入りするの事』 (前書き)

星達を新たに加え、ノートなどを売り、お金を手に入れた一行は、桃香の友達の

普通っ娘公孫賛に会いに城へそこで、公孫賛と話し真名を交換する。ちようど、盗賊団との戦の直前だった事もあり、大地一行は、手伝いを申し出、

白蓮（公孫賛）は快く手伝いを認めてくれたのだった……。

第5話 『一刀、戦場の厳しさを知り大地に弟子入りするの事』

一刀

「うおお……こりや壮観だなあ……」

侍女に呼ばれ、城門に向かうと大地達の目の前に、

武装した兵士たちが微動だにせず整列している。

その様に一刀はちよつとした感嘆が漏れる。

桃香

「すつごーい！ ここの全員、白蓮ちゃんの兵隊さんなのー？」

白蓮

「勿論さ。……とは言っても、正規兵半分、義勇軍半分の混成部隊
だけだな」

一刀

「そんなに義勇兵が集まったんだ……」

星

「それだけ、今の情勢が混沌とし、皆の心に危機感が出ているとい
うことでしょう」

愛紗

「たしかに…… 大陸各地でやれ盗賊だの何だのと匪賊が跋扈して
いるからな」

鈴々

「いったいこの国はどうなっていくのだー」

星

「民の為、庶民の為……間違った方向には行かせやしないさ。……この私がな」

そう呟いた星の瞳に宿る真剣な光。

その光には、単に自身という言葉以上の覚悟を秘めた強い煌めきがある。

桃香

「簡単には平和な世界を作れないけど、どんなに困難があろうとも私たちは立ち止まっちゃいけない！ 立ち止まれば多くの人達が悲しい思いをする。だからみんな頑張ろう、力を合わせて！」

真剣な表情で桃香はみんなに言う

一刀

「ああ！」

愛紗

「私は桃香様に着いていきます」

鈴々

「鈴々もお姉ちゃんに着いていくのだ」

星

「……そうですね。がんばりましょう！」

風

「くふふ、じゃ、私も頑張りますかねー」

稟

「及ばずながら私も手伝わせて下さい!」

大地

「(うむ、やっと『王』の感じが出てきたな、人々にやさしい『仁』^{じん}の……」

大地は、桃香の成長を嬉しく思い、

大地

「ああ……俺も協力する」

そう言って、桃香の頭を撫でる

桃香

「ふにゅあ〜」

すると心地よさそうに目を細め、猫みたいになっている。

それを見ていた白蓮は、羨ましそうな顔をして大地達の方へ近づいてくる。

桃香

「あ、白蓮ちゃんも一緒に頑張ろう!」

白蓮

「なんか、後付けのような気がするが……まあ、良いんだけど。……私だって、救国の志はあるから。忘れないでくれよな……」

そう言って、少しイジケテしまった白蓮なのであった。

会話を楽しんでいる内に陣形が決まる。

大地達は、左翼全部隊を任せられた。

どうやら大地達に期待しているらしい。

そうこうしているうちに白蓮の演説が始める。

白蓮

「諸君！　いよいよ出陣の時が来た！
今まで幾度となく退治しながらもいつも逃げ散っていた盗賊共を
今日こそは殲滅してくれよう！」

白蓮の演説はまだ続き、

白蓮

「公孫の勇者たちよ！　今こそ好機ぞ！　各々存分に手柄をたてい
！」

白蓮の鼓舞に

公孫軍兵士

「うおおお————っ！」

大地を揺るがすような鬨の声で応える。

それを満足げに聞いていた白蓮が、表情を引き締め、

白蓮

「出陣だ！」

天に高々と剣を掲げ、出陣の号令を出した。

意気揚々と縄文から出発する兵士たちと共に、大地達も一隊を率いて移動を開始した。

一刀がふと呟く。

一刀

「盗賊相手に初陣かあ。……」

一刀のつぶやきに愛紗が反応する。

愛紗

「どうかされましたか？」

一刀

「いや……こういうの、初めてだからさ」

一刀は自分の手の震えを見せながら、不安な心情を正直に吐露した。

一刀

「俺の住んでいた場所は平和でね、戦とかなかったんだ。だから他人事に思ってたんだ、いざ自分が戦いに身を投じようと

しているのが

……ちよつと怖くてね」

一刀を見ていればわかる。強がっているが本心は物凄く怖いのだらう。

だからこそ、言わなければならなかった。

大地

「戦いは誰でも怖い。しかし、怖がって何もできないじゃ、
一刀、お前———死ぬぞ」

一刀は衝撃を受けた表情になる。

当たり前だ、これは戦だ。戦争なのだ。相手との命のやり取りなのだ。

だから、必ず助かるなんてありえない。

愛紗

「ご主人様！」

大地

「事実だ。一刀……お前はとうしたいだ？」

一刀

「俺は、まだ全ての覚悟もない。……だけど桃香達と約束したんだ。協力するって……だから俺は必ずその約束を果たす。
その為には、俺は必ずこの戦から生きて帰る！」

大地

「フ……、わかった。ならばこの戦のあと、再度お前に問おう」

そう言って、大地は、馬を駆り先に進んで行った。

一刀 side

大地から言われた事……

俺は本当なら最初に桃香達と会った時に覚悟を決めないといけなかったんだ。

みんなは自分の命を、信念を賭けて戦っているのに、

俺は、まだそれができてなかった。

現実をただ見てなかったただけなんだ。

俺は……どうしたい？

そんな事はすでに決まっている。

桃香達をみんなを多くの人達を助けたい。

なら、俺も現実を見つめ、命と信念をかけて前に進んで行こう。

都合の良い言いわけに心を任せていては、何かを為すなんてできないのだから……

パシッと一度、頬を叩き、弱気な自分自身に喝を入れる。

そこには、普通の高校生の青年ではなく、覚悟を決めた一人の“漢”おとこがいた。

そして俺は、それともう一つある決心をした。

一刀 side out

そして、盗賊団達との戦が開始した。

兵士A

「全軍停止！ これより我が軍は鶴翼の陣を敷く！
各院肅々と移動せよ！」

本陣からの伝令が、命令を伝えながら前線に向かって駆け去って行った。

愛紗

「いよいよですね」

一刀

「ああ。兵隊さん達の指揮は、愛紗と鈴々、補佐に風と凜。よろしく頼むな」

風

「ふふふ、御任せなのですよー」

凜

「御意」

鈴々

「合点なのだ！」

愛紗

「桃香様は一刀様と共に」

桃香

「うん。二人も気をつけてね」

愛紗

「御意。では！」

愛紗は一刀と桃香にお辞儀をして、

愛紗

「聞けい！ 劉備隊の兵どもよ！ 敵は組織化もされていない雑兵どもだ。気負うな！

さりとて慢心するな！ 公孫賛殿の下、共に戦い、勝利を勝ち取ろうではないか！」

公孫軍兵士

「応っ！」

愛紗

「今より、戦訓を授ける！ 心して聞けい！」

公孫軍兵士

「応っ！」

稟

「兵隊の方々は三人一組で行動を！ 一人の敵に三人で当たれば必勝です！」

風

「一人は敵と対峙して防御。 一人は防御している横から攻撃。最後の一人は周囲を警戒してくださいねー」

愛紗

「敵は飢えた獣と思え、情をかけるな！ 情を掛ければ、いつしかそれは仇となって
跳ね返ってくることを知れ！」

鈴々

「みんなで一生懸命戦って！ 勝って！ 平和な暮らしを取り戻すのだー！」

公孫軍兵士

「おお—————っ！」

愛紗

「全軍、戦闘態勢を取れ！」

愛紗の号令と共に兵士たちが抜刀する。

それと同時に、盗賊達が突出してきた。

緊迫した面持ちの伝令が、本陣に向かって疾走していく。

鈴々が叫ぶ！

鈴々

「いよいよ戦い開始なのだ！ みんな鈴々に続け——っ！」

愛紗も叫ぶ！

愛紗

「関羽隊、我らも行くぞ！」

公孫軍兵士

「応っ！」

愛紗から突撃の合図が出る。

愛紗

「全軍、突撃いい——っ！」

その合図で指揮している兵隊全員、盗賊達に突撃していく！

10分後、盗賊達の数も減っていき、総崩れになった。

愛紗

「よし、今こそ割れたの力を見せつけるとき！」

大地

「全員、敵から離れろ！」

愛紗

「大地様、一体何を！」

大地は、味方が全軍、敵からかなりの距離離れたのを見て、

空間から5つの鏃やじりを持つ投擲槍を取りだす。

愛紗

「それは？」

大地

「宝具『ブリューナク』」

そう言うのと槍を斜めに構え、

大地

「真名解放『光神の輝き轟ブリューナクきし五星…』！！！！」

と叫び敵の真上に投げる。すると5つの鏃は5つの光と化し、盗賊達がいた場所を

ドゴオオオオオオオン！！！！

凄まじい音を立てて周囲を吹き飛ばす。

愛紗達は、その光景に

愛紗

「なっ……」

風

「おおー、これはすごいー」

鈴々

「にやにや、一体何なのだ!？」

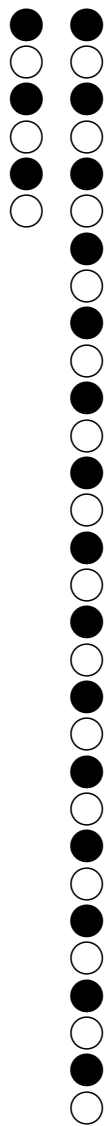
稟は、かけている眼鏡がズレ呆然となっている。

仲間の兵たちも口を大きく開き、その場から動けない。

砂煙が消え、盗賊がいた場所にはかなり大きなクレーターができており、

残りの盗賊達は、全滅していた。

こうして、盗賊団は壊滅したのだった。



戦が終わり、城に帰還すると一刀が大地に駆け寄る。

一刀

「大地さん! 俺、覚悟を決めた!」

大地

「そうか……」

一刀

「そこでお願いがある。俺を鍛えてください!」

そういつて、土下座をする。

大地

「なぜだ？」

一刀

「自分の身は自分で守らないといけないのは当然だけど、一番の理由は大切な人を守る時に力がなければ守れないから……だからお願いします！」

その一生懸命な願いに大地は、

大地

「……そのかわり、俺は手加減はしないぞ。それでもいいなら一刀を鍛えよう……」

その言葉を聞き、一刀は満面の笑みを浮かべ、

一刀

「よろしくお願いします、師匠！」

こうして、大地に弟子が出来た。名を北郷 一刀。

これから一刀は死んだ方がましと思うような修業を送ることになるのだが、

それはまた別のお話……

t o b e c o n t i n u e d ……

第5話 『一刀、戦場の厳しさを知り大地に弟子入りするの事』（後書き）

作者「ということで、大地、宝具使っちゃいましたが、どうでしたでしょうか？」

大地「最初はゲイボルクにするんじゃないかったっけ？」

作者「そうなんだけど、色々調べてたら、ブリューナクのほうがいいような気がしたのでね」

大地「ほむほむ、であの真名解放は？」

作者「それっぽい事書いて適当に作りました（～|～;）」

大地「まあ、それはいいとして、これからも宝具出すのか？」

作者「必要に応じて……」

大地「はあ、とりあえず、次回予告だ。

次回、第6話 『大地、臥龍・鳳雛に出会うの事』でまた会おう」

アンケートというか募集

ここでアンケートというか募集です。

公孫賛及び今後出てくる水鏡先生のオリジナル武器名を募集します。

といっても賞品はありませんが（～|～；）

それでもいいという方は、感想のところにオリジナル武器名とどんな装備効果があるかを書いて

以下のような書き方で送ってくださいな。

例…普通の剣EX 装備効果…なんでも普通にこなせる。

送られてきた物は全て目を通し、いいものは今後出てくるオリキャラの装備になるかもしれませんので

お楽しみに♪

一応、×切りは、12月18日の0時まで。

数多くの応募お待ちしておりますm（| |）m

第6話 『大地、臥龍・鳳雛に会うの事』（前書き）

——前回までのあらすじ

大地達一行は、盗賊団討伐に参加し、見事盗賊団を撃破した。

その討伐のさなか、一刀は自分の非力を嘆き、ここで生きていこうという覚悟を決め、

大地に弟子入りを志願する。大地は、一刀の目に決意がある事を感じ、

一刀を弟子にするのであった……

第6話 『大地、臥龍・鳳雛に会うの事』

一刀 side

盗賊団との戦で大勝利を飾った俺達は、まだ公孫賛の下に留まっていた。

その間も盗賊討伐の日々続き、劉備軍の將軍、特に愛紗・星・鈴々達の武名を

知らぬ者はほとんどいなくなった。

そして、当然大地も討伐時の活躍により、知らぬものがないほどの有名人になった。

大地は人々から尊敬と畏怖の念を込めて、『盗賊狩り』や『戦場の破壊者』など

多くの二つ名がつけられた。それをつけられた本人は、

大地

「なんだ、その厨二臭い呼び名は……」

と呆れて文句を言っていた。

それは置いとくとして、最近の大陸の様子がおかしい。

匪賊の横行。大飢饉。

そして極めつけは疫病の猛威。

人々は暴力に晒され、慎ましく生きようとしても、その日食べる物に苦勞し、

あげくに病で倒れてしまう……となれば、人々の心が安定するはずもなく、

暴乱は暴乱を呼び、暴力は暴力を招き——大陸全土を混沌とした空気に

満たされている。そんな空気が日々、重く重く圧縮され、人々の心に沈澱していく

となれば、そりゃピリピリした雰囲気になるさ。

そのピリピリが村を覆い、街を覆い、城を覆い尽くし……最後に大陸中へと

広がっていくのは時間の問題だと思われたある日、事件は起こった。

地方太守の某性に耐えかねた民が、民間宗教の指導者に率いられて武装蜂起し、

官庁を襲う事件が起きた。

それが後に『黄巾の乱』と呼ばれる戦いの序章だったのだ。

鎮圧に向かった漢軍が反撃を受けて全滅。

それをきっかけに、暴徒たちは周辺の街へと侵攻を開始した。

それはまるで蝗のような勢いで、あっという間に大陸の三分の一が暴徒達に乗っ取られ、

世は動乱の時代を迎える。

漢王朝も早期に解決できると多寡を括っていたが、討伐隊全滅の報に狼狽し、驚愕し……

最後に恐慌に陥った。その為、官軍は頼みにならずと判断し、地方軍閥に討伐を命じたのは、

つい昨日の話だ。

大地と俺は、この命令を聞いた時、俺達の戦いがはじまる事を悟ったのだった……

一刀 side out

大地・一刀

「ごめん（すまん）、遅くなった」

二人で修業をしていた所を白蓮の侍女が呼びにきて、俺達は玉座の間に連れられてやってくると

白蓮の他に星・愛紗、桃香に鈴々、稟・風と、仲間たちが一堂に揃っていた。

白蓮

「修業中すまん。呼び出してしまっ」

大地

「別に構わない……。それより皆揃って何かあったのか？」

白蓮は、真剣な顔になり、

白蓮

「……大地も、この城に朝廷よりの使者が来たのは知ってるよな？」

大地

「ああ。黄巾党を討伐せよって命令だったか？」

白蓮

「そうだ、私は既に参戦する事を決めているのだが……」

白蓮がそこまで言うのと桃香が、

桃香

「白蓮ちゃんがね、これは私たちにとって好機なんじゃないかって」

大地

「独立する為の好機という事か」

愛紗

「さすが、大地様、良くわかりで」

大地

「そりゃ黄巾党で手柄を立てれば、知名度が上がるからな。それに朝廷からの恩賞とかもあるだろうし」

白蓮

「よくわかってるじゃないか。それに桃香達がその気なれば、きっとそれなりの

地位になれるはずだ。そうすれば、もっともっと多くの人達を守る事が出来るだろう？」

白蓮

「それに残念ながら、私の力はそれほど強くない。……そりゃこの動乱を収めたいと思ってるけど
今はまだ力不足だ」

大地

「なるほど……わかった。ここを離れて、白蓮は白蓮の道があるように」

俺達は俺達の道を進んで行こう」

大地がそう言うのと鈴々が不安そうに

鈴々

「でも、鈴々達だけで大丈夫かなあ？」

一刀

「それは分からないけど。でもいつまでも白蓮の世話になる訳にはいかないんだから」

愛紗

「そうですね。……しかし、我らには手勢というものが無い。そこが問題ですが……」

愛紗のその一言に星が口を開いた。

星

「手勢ならば街で集めさせてもらえば良い。な、白蓮殿」

星の言葉に白蓮が驚いた表情で

白蓮

「お、おいおい！ 私だって討伐軍を編成する為に兵を集めなくちゃいけないんだから、

そんなの許せるわけないだろ！」

だが、星はそれに動じず、白蓮を口先三寸で丸めこむ。

星

「白蓮殿。今こそ器量の見せ所ですぞ？ それに白蓮殿の兵達は皆勇猛ではありませんか。

そんなケチくさい事言わないで器の大きい所を私たちに見せてくだされ」

白蓮

「うつ…… はあゝゝ、わかった。でも、あまり多く集めないでくれよ」

白蓮はため息をつき、大地達が義勇兵を募る事を認めてくれた。

それから大地達は、愛紗と稟が、義勇軍を募り、六千人の人達が集まった。

白蓮の顔は、かなり引きつってたが、兵糧と食糧も用意してくれた

本当にいいやつだ。

ということで、全ての準備を整え大地達は、集まった義勇兵を率いて出陣の時を迎えていた。

桃香

「たくさん集まってくれたからなんとか戦えそうだね、ご主人様達」

一刀

「ああ、白蓮にはいつか恩を返そう」

大地

「そうだな、それとこれからの事を決めないとな」

鈴々

「こうきんとーを探し出して、片っ端からやっつけるのだ！」

稟

「でも、そんな乱暴なやり方だと、すぐに兵糧が無くなりますよ？」

鈴々

「むう……ならどうすりゃ良いのー？ 風は何か考えあるのかー？」

風

「……ぐう」

稟

「こら、風、寝るなっ！」

風

「……おおっ？」

風

「んー、そうですね——」

風が考えていると、

???

「しゅ、しゅみましえん！ あう噛んじやった」

どこからともなく声が聞こえてきた。

一刀

「……??？」

大地

「？」

キョロキョロと周囲を見回してみるも、声を上げたであろう人物の姿が見えない。

???

「はわわ、こっちです。こっちですよー！」

桃香

「え——つと……声は聞こえど姿が見えず……」

愛紗

「ふむ？ 一体誰が？」

風

「みなさん、どこを見てるんですかー 下ですよ、下」

風の言葉により大地が下を向いた先に

可愛らしい帽子と……歯でも生えていそうな帽子を被った二人の少女が、

緊張した面持ちで立ち尽くしていた。

大地

「皆、下を向いてみる」

全員の視線が、下に向いた瞬間暁と風を除いた全員驚いた。

???

「こ、こんにちゅは！」

??

「ち、ちは、ですう……」

一刀

「こんにちは。えーっと……どちらさん？」

???

「わ、私はしょ、諸葛孔明れしゅ！」

??

「私はあの、その、えと、んと、ほ、ほど、ほーとうでしゅ！」

二人は物凄くカミカミな感じでそう言った。

桃香

「んーと……諸葛孔明ちゃんに、ほ、ほ……」

鳳統

「鳳統でしゅ！ あう……」

愛紗

「諸葛亮に鳳統、か。……あなた達のような少女がどうしてこんなところに？」

諸葛亮

「あ、あのですね、私たち荊州の水鏡塾っていう私塾で学んでいたんですけど、

でも今この大陸を包み込んでいる危機的な状況を見るに見かねて、
それで、えと……」

鳳統

「力の無い人達が悲しむのが許せなくて、その人達を守る為に私たちが学んだ事を

活かすべきだって考えて、でも自分たちだけの力じゃ何も出来ないから、

誰かに協力してもらわなくちゃいけないくて」

諸葛亮

「それでそれで、誰に協力してもらえば良いんだろうと考えた時に、
天の御遣いと

神の代行者が義勇兵を募集してるって噂を聞いたんです！」

鳳統

「それで色々話を聞くうちに、皆さんの考えが私たちの考えと同じだって分かって、

協力してもらうならこの人だって思ってる」

諸葛亮

「だからあの……わ、私たちを戦列の端にお加えください！」

鳳統

「お願いします！」

真剣な眼差しで大地達を見つめ、必死に懇願する二人の少女。

桃香

「んー。ご主人様達、どうしょっか？」

大地

「二人を戦列に加える。この二人なら、必ず助けになるはずだ」

一刀

「俺も賛成だ。俺もこの子たちが俺達を助けてくれるとそう信じてる」

桃香

「じゃ、決まりだね！」

愛紗

「しかし……年端もいかぬ少女を戦列に加えるのは……」

大地

「なに。将は何も剣を持って戦うことだけじゃないだろう？」

愛紗

「そこまでおっしゃるのなら私はご主人様達の判断に従います」

一刀

「そういうことで……二人とも、俺たちに協力してくれるかな？」

諸葛亮

「はひっ！」

鳳統

「がんばりましゅ！」

一刀

「ありがとう。……俺の名前は北郷 一刀。一応、天の御遣いって身分らしい」

大地

「俺は、室谷 大地。神の代行者だ。よろしくな……」

諸葛亮

「わ、私はえと、姓は諸葛！ 名は亮！ 字は孔明で真名は朱里です！

朱里って呼んでください！」

鳳統

「んと、姓は鳳で名は統で字は士元で真名は雛里って言います！あの、よろしくお願いします！」

一刀

「朱里ちゃんと雛里ちゃん、か。……こちらこそ宜しくな！」

こうして、新たな仲間2人が加わった。

その様子を水晶球で見ている人物が三人。

??

「おのれ、北郷め！」

一刀を歳が変わらない白い道服を着た青年がそう憎しみを込めて呟いた……

continued……

to be

第6話 『大地、臥龍・鳳雛に会うの事』（後書き）

作者「はい、今回は、はわわ軍師とあわわ軍師の2人が仲間になりました」

大地「それはいいが、最後のやつは？」

作者「それは次回わかります。例のあの人達です」

大地「ん？ あいつらなら二人じゃ？」

作者「もう一人は君の【お客さん】だよ」

大地「！ ……なるほど」

作者「ということで、次回予告よろ」

??「次回、第7話 『暗躍する闇、動き出す使徒の事』でまた会おう！

今度こそ、殺してやるぞ！ 北郷！」

作者「殺気出しまくりだな、こいつ（～；）」

??「それがいいですよ」

作者「お前もかよ、もう一人は？」

??「それがやることあるそうで」

作者「ふうん、ではまた次回お会いしましょう。さよなら！」

第7話 『暗躍する闇、動き出す使徒の事』 (前書き)

———前回までのあらすじ

漢王朝より黄巾党討伐の命令が各諸侯に言い渡される。

大地達は、白蓮の進めもあり、独立する事になった。

準備も万端に出来、いざこれからの事を話しあってる最中、二人の少女が大地達の仲間になりたいとやってきた。

その少女たちこそ、【臥竜】諸葛公明と【鳳雛】鳳士元だった。

第7話 『暗躍する闇、動き出す使徒の事』

?????

side

ここは、観測者達の住まう空間。

左慈

「ええい！ 忌々しい！」

そう言って、傍にあった椅子を蹴り飛ばす。

于吉

「おやおや、左慈荒れてますねー」

左慈

「この【外史】でもあいつは、セカイを狂わせる！」

しかも、なんで神の代行者まであっち側なんだ！」

于吉

「それは、たぶん管理者の願いでしょう。代行者とはそういうものですしね」

左慈

「それはそうだが、神の代行者がいるとなると容易に北郷を消す事は難しいぞ」

于吉

「……そこなのですが、協力して下さるお方をここに呼んであります」

左慈

「協力者だど？」

左慈が于吉を訝しげに見る。

于吉

「お入りください」

于吉がそう言うのと何の前触れもなく男が現れた。

現れた男は、大体20代後半で背は185cmくらいの真っ白い神父服を着た紫髪の短い髪に

黄金の瞳をしていた。

左慈

「貴様は？」

左慈が名前を訊ねると

サタン

「……我は【憤怒】を司る憤怒の使徒……名をサタンⅡDⅡラーズという」

それを聞いて左慈が驚く。

左慈

「憤怒の使徒だどっ！　じゃ、お前はネガ・マリスの……」

サタン

「……左様。我はネガ・マリスより生まれし者」

左慈

「ふ、ふっははははははははあ!!」

左慈が突然笑い出し、于吉がたじろぐ。

于吉

「どうしたのですか、一体？」

左慈

「これが笑わずにいられようか！ この男がいれば今度こそ北郷を無に帰す事が出来る！」

なぜ、左慈がここまで一刀に憎悪しているかというと

一刀は一度、別の外史に飛ばされており、そこで左慈達の陰謀を悉く潰した為である。

無論、一刀はそれを覚えていない。

サタン

「貴様の怒り確かに受け取った……では、私はこのセカイに怒りと憤りをばら撒いて来よう……」

そう言って、サタンはその場から姿を消した。

于吉

「では私も動くとしますかね、では左慈また後ほど」

星さんそれ正解です。

一刀

「ま、またまた」

一刀は冷や汗を流してる。

それから大地一行は前進し、ちょうど目的地の半分まで辿り着いた。すると、道端に誰か倒れている。

大地が駆け寄り、倒れている人を見るとそれは朱里達より少し背の高い少女だった。

髪はウェーブかかった感じで髪色は水色。顔はかなりの美少女といった感じで胸は結構でかい。

愛紗

「大地様、危険です！ お下がりでください！」

大地

「いや、大丈夫だ……ほら」

大地がそう言うのと愛紗達は、その倒れている少女に近寄る。

すると朱里と雛里が驚いている。

朱里・雛里

「瑞貴ちゃん！」

一刀

「朱里、この子と知り合いなのか？」

朱里

「はい、彼女の名前は、徐庶。私たちと同じく水鏡先生の下で学んだ同級生です」

一刀と大地は顔を見合わせ、

一刀・大地

「おいおい……」

二人とも驚くのであった。

そう彼女は、正史なら諸葛亮つまり朱里を劉備に紹介した人物なのだ。

また撃剣の使い手で腕もたしかだ。

一刀

「これもこのセカイだからありうることなんですかね、大地さん」

大地

「そうかもしれないな……とりあえず、この子が目を覚ますまで待とう」

数十分後、徐庶が目を覚ました。

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

第7話 『暗躍する闇、動き出す使徒の事』（後書き）

作者「ということで、左慈と于吉そして憤怒の使徒サタンに
オリキャラの徐庶が登場しました」

大地「とうとうこのセカイで俺以外のオリキャラが出たな……」

作者「いつ出そうか悩んだんだけどね」

一刀「ふむふむ、とりあえずキャラ紹介は？」

作者「すっげーナチュラルに一刀おるし」

一刀「気にしない事だな」

作者「キャラ紹介はまた今度まとめてからします」

一刀「ほう。それは楽しみだ」

大地「これからいっぱいでてくるのか？」

作者「おう、作者はアニメは見えてないのでアニメに出てたキャラも
違う感じになるかもね」

大地「ふむ」

作者「まあ、そこは何とか考えるからこうご期待ということで、一
刀、次回予告よろ！」

一刀「今回は、徐庶と水鏡先生が登場します。

次回、第8話 『大地、水鏡先生に求婚されるの事』でまた会おうぜ!」

大地「はあ!?!」

作者「驚いとる、驚いとる。では次回またお会いしましょう、バイバイ!」

第8話 『大地、水鏡先生に求婚されるの事』（前書き）

———前回までのあらすじ

大地達の裏で観測者の左慈と于吉それとネガ・マリスの憤怒の使徒サタンが、

大地達をこのセカイから排除し、セカイを無に帰す計画の準備が着々と進められていた。

一方その頃大地達は、白蓮の城から兵を率い、近くの黄巾党の砦の一つを壊滅させようと

移動してたところ、その道すがらで、一人の少女を助ける。

その少女は、朱里と雛里の友人、徐庶だった……

第8話 『大地、水鏡先生に求婚されるの事』

徐庶

「ここは……」

目を覚ました徐庶は辺りを見ると知ってる顔がいた。

徐庶

「朱里に……雛里……？」

朱里

「そうだよ、瑞貴ちゃん！」

雛里

「どうしてここで倒れてたの？」

徐庶

「倒れて……あ！ こんな所で倒れている場合は……」

朱里

「一体どうしたの！？ そんなに急いで」

徐庶

「水鏡先生たちが、黄巾党に捕まったのよ！」

朱里

「えええ！……！ 水鏡先生が！」

雛里

「それは大変！　すぐに助けに行かないと」

朱里と雛里は、徐庶の言葉を聞き、動揺している。

大地

「……落ちつけ。こういうときこそ冷静な判断が必要になる」

朱里・雛里

「！」

朱里達は、大地の言葉を聞き、冷静さを取り戻した。

徐庶

「えーと、この人達は？」

朱里

「紹介するね、こちらの後ろ髪が長い男の人が、私達のご主人様

室谷 大地様。「よろしく」で、こっちの白い服を着た方が、も

う一人のご主人様

北郷 一刀「よろしくな！」で、こちらの方が劉備玄德様「よろしくね〜♪」

徐庶

「徐庶です。よろしくお願いします」

徐庶は、皆にお辞儀をした。

雛里

「瑞貴ちゃん、一刀様と大地様は、天の御遣いと神の代行者なんだよ〜」

徐庶

「え？ あのお占師の管輅が言っていた？」

朱里

「うん。正真正銘本物だよ」

朱里は笑顔でそう言う

一刀

「まあ、そう言われてるらしいけどね」

一刀は苦笑いを浮かべる。

大地

「まあ、本当の事だしな……」

大地は、代行者なのは事実なので普通にそう言った。

徐庶

「はあ……」

一刀と大地を徐庶は、頭の先から足のつま先までじーと眺める。

徐庶

「たしかに北郷さんも室谷さんもそれっぽいが……」

一刀も大地もこのセカイとは違う服装をしていたので、一応そうなのかなと徐庶は思ったが、

やはり情報元がインチキ占い師の管轄の為、信じられなかった。

朱里

「あとは、戦場での活躍をみてもらったほうが信じられるかも」

大地

「それより、話を聞かせてもらってもいいか？」

大地は徐庶にこう訊ねると

徐庶

「はい、あれは————」

徐庶が語り始めた。

徐庶の話はこうだ。

10日ほど前の晩、水鏡塾に黄巾党を名乗る男たちがやってきて、

水鏡先生及び数人の若い女学生を連れて行ったらしい。

徐庶は、実家に帰省していた為、難を逃れたそうだ。

徐庶が水鏡塾に帰ると建物は何々壊されており、

黄巾党から見つからないように隠れていた女学生の話聞き、

水鏡先生を助ける為、旅に出たのはいいが、

水鏡先生の捕まってる砦の場所が分からない為、

情報を集めながら探していたが、途中で路銀が尽き、

飲まず食わずで歩いた為、この道で意識を失ったらしい。

徐庶は語り終えた途端、徐庶のお腹の虫が鳴る。

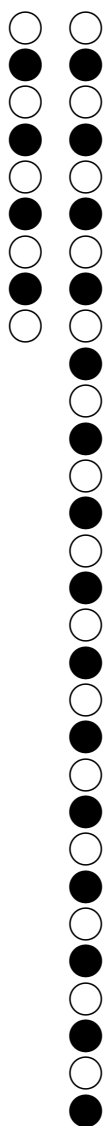
ぐうーうーうー……

大地

「……とりあえず、徐庶に食事を」

稟

「わかりました。すぐに用意します」



徐庶の食事が終わった事を確認すると

大地

「では、今から軍議に入る」

徐庶の情報によると、今から行く砦は、前面に数多くの見張りがあるが、

ある一か所だけ潜入できる箇所があるらしい。

徐庶

「ここです。砦の東側にある兵糧庫の裏」

風

「ふむふむ、とりあえず、今回の作戦は、
前面に居る全ての見張りを我々が引きつけ、
徐庶さんと大地様が、その兵糧庫裏から侵入し、
連れて行かれた人達を助けるっと思った感じで
いかがでしょう？」

大地

「それでいい……」

愛紗

「しかし、大地様を危険な目に……」

稟

「お言葉ですが、大地様がここにいる黄巾党のやつらに負けるとで
も？」

稟の言葉に愛紗は、

愛紗

「……たしかにそうだな。わかりました」

大地

「では、準備が出来次第、始めるぞ……」

劉備軍

「おお！」

こうして作戦はスタートした。

———黄巾党砦前

見張りが砦の前方から大量の馬の足音を聞いた。

黄巾兵 A

「な、なんだ？」

見張りが目を細めて遠くを見ると関と張の牙門旗と十文字が入った
牙門旗を掲げた

劉備軍が砦に凄い速さで迫ってきていた。

黄巾兵 A

「て、敵襲だあゝ!!！」

見張りが、劉備軍が攻めてきた事を砦にいる黄巾兵全員に連絡する。

黄巾兵隊長

「いくぞ！ 野郎共ゝ。劉備軍なんか蹴散らせ!!！」

砦の門が開き、かなりの数の黄巾兵が砦から出てきた。

愛紗

「これより黄巾党の砦を攻め落とすぞ!!！」

劉備軍

「おおー!!！」

そして戦いは、始まった。

一方その頃、

兵糧庫の裏から潜入した大地と徐庶は、大地の持っている道具の一つ

『透明シート』を被り、姿を消し、誰にも気づかれず、

砦の中に入り、水鏡達が捕えられている部屋へとたどり着いた。

大地達は、シートを外し、大地がドアを蹴破る。

ドガッ！！

すると目の前に水鏡とその生徒の女学生数名が、

手錠をかけられて、今まさに黄巾兵の慰み者にされようとしていた。

黄巾兵B

「な、なんだおまえたちは！！！」

突如現れた男と女に黄巾兵は動揺している。

大地は素早く黄巾兵達に近づき、

大地

「気功闘技『斬羽』……！！」

大地の手から、物凄い量の刃が現れ、羽が落ちる如く、

黄巾兵達を切り刻んで行く。

黄巾兵B

「ぐああ!!」

ドサッ!

部屋にいた黄巾兵達は全員倒れた。

水鏡

「あ、あなたは？」

大地

「俺は室谷 大地。この子の案内でここへ来た」

大地の後方から徐庶が現れ、

水鏡

「瑞貴！」

徐庶

「香蘭先生こうらん」

徐庶は、泣きながら水鏡と抱き合う。

徐庶

「ぶ、無事でよ、がっだですよ」

水鏡

「あらあら、瑞貴は、泣き虫ね」

水鏡は、子供をあやす様に優しく徐庶の頭を撫でる。

黄巾兵C

「これは一体……」

部屋の入り口から別の黄巾兵達がやってきた。

黄巾兵D

「これをやったのは貴様か!!」

大地

「……だったらどうなんだ？」

大地は、凄まじい殺気を放ち黄巾兵達を睥睨む。

黄巾兵C

「ひ、怯むな！ 相手は、男一人と後は女子供だ！
かまわねえ、やっちまえ!!」

黄巾兵

「おお!!」

そういつて、黄巾兵達が大地達に襲いかかってくる。

大地は、空間から刀を2本取り出した。

左手に持った刀は、刀身に炎を纏った【獄炎刀・焰】
ごくえんとう ほむら

そして右手に持った刀は、刀身が冷気を帯びた【氷結刀・雪羅】
ひょうけつとう せつら

大地は、目視できないほどの速さで黄巾兵達を斬り捨てていく。

ザシユウ！ ザシユザシユ！！

黄巾兵C

「ぐはぁ！」

左にいた者は、炎に全身を焼かれ、右にいた者は、傷口から凍り粉々になっていった。

黄巾兵D

「ば、ばけものだー！！」

そういつて逃げ出した残りの黄巾兵達を大地は、

大地

「炎氷混合！ 焰王氷塊陣！！」

炎を纏った大きな氷の塊を逃げ出した黄巾兵の頭上に投げ、

それが、破裂し、鋭く上がったナイフのような氷となり、

黄巾兵達の全身を貫通していく！！

黄巾兵

「ぐぎやあああああ！！！！！！」

そして、最後に貫通した所の傷跡から燃え出し、

あわれ黄巾兵達は、消し済みになった。

一瞬、その光景に水鏡と徐庶・水鏡塾の女学生たちは、

呆気にとられていたが、

大地

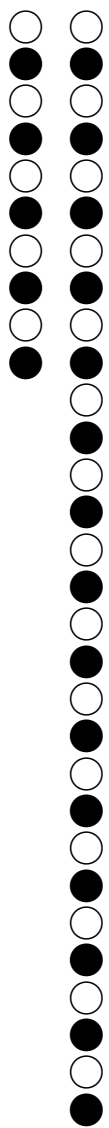
「すぐにここから離れよう……」

その言葉で水鏡達は、ハツとなり部屋から脱出した。

それから砦内で黄巾兵達が出てきたものの、

大地がでてきた全員を打ち倒し、無事水鏡達は、砦から脱出できた。

一方、一刀達も出てきた黄巾兵達を倒し、この砦は、陥落した。



砦陥落後、

水鏡

「本当にありがとうございました」

そういつて、深々と大地達にお辞儀をする水鏡。

徐庶

「本当にありがとうございました、あなた達がいなければ、
香蘭先生を助ける事ができませんでした」

朱里

「私達からお礼を言います。水鏡先生を助けて下さり、ありがとうございます」

雛里

「ありがとうございました」

朱里達からも頭を下げられる。

大地

「よしてくれ、俺達は、当たり前前の事をしたただけだ。それに朱里達の友人や先生なら尚更な」

水鏡

「それでも助けて頂いた事は変わりません。それに……」

その瞬間、水鏡の顔がうつとりとした表情となり、

水鏡

「それに私、あなたに惚れてしまいました」

一刀達

「ええええええ！！！！！」

大地

「…む」

水鏡

「ぜひ、あなたの傍に一生居させてください！」

一刀達

「一生!？」

大地

「……ちよつと待ってくれ! 好意はうれしいが、今は女性に現^{うつ}を抜かすわけにはいかないんだ。折角だが、お断りさせていただけよう」

大地は水鏡の求婚を断ったが、それでも水鏡は、聞く耳を持たず、

水鏡

「……それでも私は決めましたわ。どんな形でもあなたに着いていこうと」

水鏡の目は、何度断られようとも諦めないという信念が籠った目をしていて。

大地は、水鏡の真剣な眼差しを見て、ため息をつき、

大地

「はぁ~~~~! 勝手にしてくれ……」

どうやら折れたようだ。

水鏡

「勝手にしますわ……旦那様」

一刀達

「旦那様~~~~!？」

大地

「それは……違うんじゃないか？」

水鏡

「いいえ！ 違います、あなた様は私の唯一無二の旦那様と決めましたから」

大地は、その言葉を聞いてフラッと立ちくらみがした。

桃香

「だ、大丈夫！？ 大地様！」

愛紗

「大地様、お気を確かに！」

風

「お兄さん、持てますね」

稟

「大地様と水鏡殿が……ブッ……！！」

鈴々

「ほわー、すごい鼻血なのだ」

星

「おやおや、大地様も隅に置けませんな」

一刀

「大地さん、大丈夫か」

それを見ていた徐庶は、

徐庶

「なんでしょう、この混沌とした空間は……」

徐庶の言葉に水鏡塾の女学生たちは一斉に頷いた。

こうして、水鏡が大地達の仲間になった。

水鏡

「あ、私の真名は【香蘭】といいます。ふつつか者ではございますがよろしく願います。旦那様♪」

大地は、香蘭の言葉に頭を抱えるのだった。

大地

「（あれ、俺どこで間違えた……）」

t o b e c o n t i n u e d ……

第8話 『大地、水鏡先生に求婚されるの事』（後書き）

作者「ということで、大地がまたフラグを立てましたよっと」

大地「俺どこで間違えたんだろうか……」

作者「諦めろ！　そしてこの小説の水鏡はかなりの美人でナイスバディだぞ」

大地「まあ、それはいいんだが……なんか自分のペースが崩される……」

作者「とりあえず、がんばれ主人公」

大地「元々の元凶がそんな事言うな……！！！！」

作者「ちよつと待て……！！！！　獄炎刀振り回してくんなー！！」

大地「お前のせいだ！　お前のせいでえええ！！！！！！」

作者「次回、第9話　『徐庶の決意。三羽烏との出会い』でまたお会いしましょう！！

では、俺は逃げ——」

大地「逃さん！　『獄炎刀・火達磨』！！！！」

ボオオオオオオオ……！！！！！！

作者「ぎゃあああああ……!!!!」

第9話 『徐庶の決意。三羽烏との出会いの事』（前書き）

——前回までのあらすじ

大地・徐庶は、水鏡達が捕えられている砦に潜入し、無事水鏡達を助ける。

黄巾兵掃討後、大地はいきなり水鏡に求婚されるが、大地は、すぐに断る。

しかし、水鏡はまだあきらめてないようで……。

第9話 『徐庶の決意。三羽鳥との出会いの事』

黄巾党の砦の一つを壊滅させた俺と徐庶は、

桃香達と別行動を取り、情報収集の為、

近くの邑に立ち寄った。

しかし、なぜか盗賊と勘違いされ、

傷のある少女

「貴様ら、黄巾党だな！ 成敗してくれる！」

そういうと大地に襲いかかってくる。

傷のある少女

「はっ！」

少女は、鋭く速い蹴りを連続して繰り出す。

しかし、常人ならいざ知らず、代行者の大地にとってはあまりスロ
ーな速さに

ヒョイ ヒョイ

簡単に蹴りを交わし続ける。

傷のある少女

「盗賊にしては、やるようだな、では、これはどうだ！」

少女がそういうと少女の足が気を纏った。

傷のある少女

「はぁ！ 崩牙烈きや——」

眼鏡をかけた少女

「凧ちゃん、ストップストップなの！？」

爆乳な女の子

「そや、凧い、その人達違う！」

少女が、技を放とうとした瞬間、彼女の仲間とおぼしき、二人の少女が、

止めに入った。

—————10分後、

傷のある少女

「ほんと—————うに申し訳ありませんでした—————！」

大地

「いや、もう済んだ事だ。気にするな……」

傷のある少女

「しかし、勘違いとはいえ、あの【戦場の破壊者】室谷殿に足を向けるとは……私はなんと愚かな」

誤解も解け、傷のある少女は、大地に土下座をして謝っている。

大地

「とりあえず、顔を上げて立ってくれ……かわいい女の子にそんなことされては、

こっちのほうがいたたまれない」

傷のある少女

「か、可愛い？ 私がですか？ ／／／／／（赤面）」

可愛いと言われた少女顔が真っ赤になる。

眼鏡をかけた少女

「あ、風ちゃん照れてるの」

爆乳な少女

「風、照れちゃってかわいい」

傷のある少女

「沙和！ 真桜！」

風と呼ばれた少女は、凶星を突かれたのか二人を怒鳴る。

眼鏡をかけた少女

「きゃー！ 風ちゃんが怒った」

爆乳な少女

「凶星突かれたちゆうって、うちに怒んなや、風」

傷のある少女

「うるさい！ うるさい！ うるさい！！！」

大地

「（なんだ、これ……）」

女が三人寄れば何とやらというが、本当にそうだと初めて大地は思った。

徐庶

「すみません、お話いいですか？」

傷のある少女

「あ、はい、すみません」

それからお互いの自己紹介をした。

傷のある少女

「私の名前は、楽進と申します。よろしくおねがいします」

そう言って丁寧に大地達にお辞儀をした。

眼鏡をかけた少女

「私の名前は、于禁なの。趣味は、おしゃれ。よろしくね」

爆乳な少女

「うちの名前は、李典や！ よろしゅうな」

大地

「俺は、室谷 大地だ……よろしくな」

徐庶

「私は徐庶といえます。よろしく願いします」

大地

「ふむゝ（この子達が、曹操軍の將軍になる子達か。やはり女なんだな）」

大地がそう思っていると

樂進

「あの……何か？」

樂進が怪訝そうに大地を見ている。

大地

「いや、なにもそれよりもなぜ君は俺に襲ってきたんだ？」

樂進

「それは……」

樂進の話によると、最近この邑に黄巾党がやってきて、

食糧や女を差し出さなければ、全員皆殺しにすると脅されおり、

ちょうど、旅の途中で立ち寄ったこの三人に邑の村長に頼まれ、

用心棒することになったらしい。

大地

「それで、俺を襲ったわけだ。確認もせず……」

大地は少し呆れてそう言うと、楽進はバツが悪そうに

楽進

「本当に申し訳ありませんでした」

于禁

「夙ちゃん、たまにこういうポカしちゃうの」

楽進

「うっ…」

李典

「それに黄巾党なら黄色の布、身につけてるやろ」

楽進

「ううっ……」

楽進は二人に言われ、縮こまっている。

大地

「二人ともそれくらいにしてやれ……話は戻るが、そいつらはいつ来るんだ？」

楽進

「はい、明後日にはやってくるそうです」

大地

「……明後日か、一刀達に連絡を取るか」

そういうとジャケットのポケットから携帯電話を取りだす。

この携帯電話は、大地が魔改造し、このセカイでも使えるようにしたのだ。

もちろん、一刀の携帯も同じ改造を受けている為、いつでも使用できる。

李典

「な、なんやそれ!!」

李典は、携帯を見て興味深々に目が輝かせ大地に訊ねる。

大地

「これは、携帯電話といってな、遠くの人と話せる道具だ、あ、もしも一刀か？」

一刀

「『大地さん、どうした?』」

大地

「すぐにここに来てくれないか? 実は————」

大地が一刀に事情を説明すると、

一刀

「『ああ、わかった。それと香蘭先生そちにいつてないか? 姿が見えな……』」

一刀が携帯で言ってる最中に、

大地達に猛スピードでこちらに近づいてくる者が……

大地

「あれは……まさか！」

香蘭

「大地様~~~~~あ!!」

大地

「香蘭!？」

徐庶

「香蘭先生!？」

香蘭

「酷いじゃないですか〜大地様〜、私を置いて行くななんて」

大地

「あ…ああ、すまない」

香蘭を見た大地は引き攣った顔でそう言った。

香蘭

「それで————この人達は？」

香蘭が、楽進達に気付く。

楽進

「私達は————」

楽進達は再度、香蘭の為に自己紹介し、今の状況を伝えた。

香蘭

「ふむふむ、なるほど……とりあえず、村長さんにあるかしら？」

楽進

「は、はい！　こちらに」

楽進達の案内で、村長の家につき、村長と村人たちと面会した。

村長

「あなたが……お噂はかねがね。それで私に何の用で？」

香蘭

「貴方達、黄巾党と戦う覚悟はある？」

香蘭がそう言うのと周りがガヤガヤ騒ぎだす。

村長

「覚悟とは？」

香蘭

「この邑を。自分たちの邑を守る覚悟よ」

村長

「それは……」

村長が香蘭の問いに言葉を詰めらせると

邑の若者が、

若者A

「俺は戦うぞ」

それを聞いた別の若者が、

若者B

「俺も戦う。自分の邑を守るんだ！」

それに触発された村人全員が、覚悟を決め、

村長

「わかりました。私もこの邑の為、戦います」

それを聞いた香蘭達は自信満々の顔で、

香蘭

「私達と一緒に邑を守りましょうね、大丈夫なんせこちらには、

【盗賊狩り】室谷 大地様がいらっしゃるんだから」

村人達

「おお〜」

大地

「……そこまで期待しないでくれ。だが、この邑を守る為、貴方達の力を借りたい」

こうして、大地達と村人たちは、さっそく邑を改造していく。

大地の指示で邑の周囲にバリケードを設置し、壁も大地が出した強固な金属製のものに

変える。

それを見ていた香蘭は、

香蘭

「さすがですね、大」

と呟いた。

大地

「！　やはりおまえは！？」

大地の表情が変わる。

徐庶

「大地さ〜ま〜」

ちょうど、徐庶が呼びに来た為、

香蘭

「ふふふ、行きなさい、大」

大地

「……ああ」

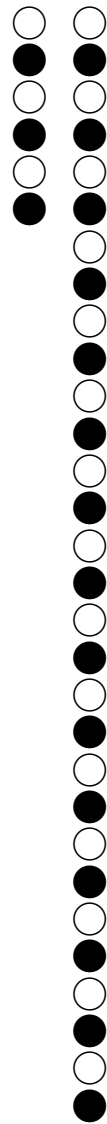
なんか釈然としない顔で、徐庶の元に行く大地。

その後ろ姿を見ながら、

香蘭

「……やっと会えたんだから今度こそは……」

誰にも聞こえない声で呟いた。



大地

「何か用か？ 徐庶」

徐庶

「はい、ぜひ私も貴方の下で軍師としてお仕えさせてください」

そういうと徐庶は手を前に組み頭を下げ、片足を地面に着いた。

大地

「いいのか？」

徐庶

「はい！ それと今後私を呼ぶ時は、瑞貴とお呼びください」

大地

「そうか、わかった。よろしくな、瑞貴……」

それを聞いて、瑞貴は満面の笑みで、

瑞貴

「はい！」

こうして、徐庶こと瑞貴が、俺達の仲間になった。

———瑞貴 side

最初は、あの方が神の代行者ということは信じていなかった。

あのインチキ占い師の言うお告げなので信じる事もできなかった。

しかし、香蘭先生救出の際にあの方は、何もない空間から

変わった剣を出し、黄巾兵どもを一瞬のうちに倒してしまった。

それにあの凛々しい御姿。

私はあの方のお姿に畏れと尊敬の念を覚えた。

それを覚えた瞬間、ある一つの決意をした。

”この方に一生お仕えしよう”と。

———瑞貴 side out

t o b e c o n t i n u e d ……

第9話 『徐庶の決意。三羽鳥との出会いの事』（後書き）

作者「ということで、三羽鳥でてきた」

大地「やけに機嫌がいいな」

作者「だって李典好きだし」

大地「……それでか」

作者「なんでそんな顔すんのさ！」

大地「だってな。大半こっちの仲間になるやつって作者が好きなやつじゃん」

作者「そうですが、何か」

大地「開き直りやがった」

作者「それはともかく、そろそろ君の疑問に思っていた事が次回わかるよ」

大地「何？」

作者「ということで、次回 第10話 『大地、水鏡の正体を知り驚くの事』

でまたお会いしましょう」

大地「水鏡の正体……ということはまさか!？」

作者「それは次回のお楽しみ
(にやり)」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2406z/>

A.O.G -Agent Of God- ～代行者《エージェント》と三国の恋姫たち～

2011年12月20日20時46分発行